

## 第8章 海上作戦の観点から見たフォークランド戦争

フォークランド戦争では初めて巡航ミサイルによる海軍艦艇に対する攻撃が行われ海軍艦艇は破壊された。これは洋上における海軍艦艇に対する持続的な攻撃が第二次世界大戦後初めて生じたたなかでの出来事であった。また原子力潜水艦と短距離離陸垂直着陸機 (Short Take Off Vertical Landing: STOVL)が実戦で使用されたもの初めてであった<sup>548</sup>。フォークランド戦争における海上作戦では、以上のような特徴があったが、イギリス海軍はフォークランド諸島を奪回するため、戦闘艦艇等 39 隻 (潜水艦を含む)、海軍補助艦艇 22 隻、さらに 45 隻の商船を徴用し最終的に 110 隻以上の艦艇を派遣した<sup>549</sup>。

### 第1節 イギリス軍の水上部隊の動き

#### 第1項 密かな編成と進出

4月2日の1930(ロンドン時間)に、イギリスでは閣議で任務部隊の出港の合意に至るが、イギリスはそれまでに南太平洋におけるアルゼンチンの活動に対して外交交渉に悪影響を及ぼさないように秘密裏に軍事的措置をとっていった。

3月29日朝、サッチャー首相とキャリントン外相は1隻の原子力潜水艦を氷海警備船「エンデュアランス」支援のために南大西洋に派出することを決めた。この知らせを受けたノット国防相は電報で「エンデュアランス」の補給支援に補給船「フォート・オースティン」を同日ジブラルタルから出港させたこと、極秘裏に13日までにはフォークランド諸島に着くように原子力潜水艦を派出すること、そして2隻目の原子力潜水艦の派出準備をすることを知らせた。補給船「フォート・オースティン」の派出は、今後南大西洋に派出される可能性のある艦艇への補給支援も念頭にあった<sup>550</sup>。そして次の助言もしていた。

現在、ジブラルタル沖で演習中の艦艇のなかから、駆逐艦およびフリゲート艦7隻で編成する艦隊を派出することは可能であり、フォークランド諸島に2、3週間で着くことができる。しかし、この艦隊だけでは十分な兵力な任務部隊を構成できない。約1週間は要する十分な任務部隊の編成は直ちに公知のこととなる。フォークランド諸島に到着するには、さらに3週間は必要であると<sup>551</sup>。

この日、艦隊司令官フィールドハウス海軍大將は第1艦隊司令官のウッドワード海軍少將に、第1艦隊の艦隊を南大西洋に向かわせる準備にかかるよう命じている<sup>552</sup>。

3月29日(月)にノット国防相はリーチと会った際、フリゲート艦を待機させることに同意すると共に、原子力潜水艦を派出することを要望した。ただ、直ちに対応可能な原子力潜水艦はなく、ジブラルタル沖で第1艦隊と共に演習(「SPRINGTRAIN」)を行っていた「スバルタン」を3日程度で派出するとなっ

<sup>548</sup> Harry D. Train, II, "An Analysis of the Falkland/Malvinas Islands Campaign," *Naval War College Review* (vol. 41, no. 1, Winter 1988), p.34.

<sup>549</sup> *The Falklands Campaign: The Lessons*, Cmnd 8758 (London: HMSO, 1982), Annex A.

<sup>550</sup> Lord Joseph Franks, *Falkland Islands Review: Report of a Committee of Privy Counsellors*, Cmnd 8787 (The Franks Report), (London: HMSO, 1983), p.61(col.213).

<sup>551</sup> *ibid.*, p.62(col.213).

<sup>552</sup> John Fieldhouse, "Despatch by Admiral Sir John Fieldhouse, G.C.B., G.B.E., Commander of the Task Force Operations in the South Atlantic: April to June 1982," *The London Gazette* (no. 49194, 13 Dec. 1982), p.16109.

た。この突然の南大西洋への原子力潜水艦の派出は1隻目のときでさえイギリスの潜水艦隊司令部にとって不満だったようである<sup>553</sup>。「スパルタン」に行動を命じ、以後、南大西洋での作戦に派出されたすべての潜水艦の指揮を執った潜水艦隊司令官(FOSM)のハーバート(Herbert)海軍中將は自身の戦中日誌(war diary)に次のように記していた<sup>554</sup>。

南大西洋で12名の屑鉄業者が引き起こした騒動に、第1艦隊と一緒に演習(「SPRINGTRAIN」)中の「スパルタン」の演習を中断してまで、国防省の要求に応じて南大西洋に派遣するなど信じがたい。

「スパルタン」は演習から外され、4月11日・12日までにはフォークランド諸島周辺に到着できるようにジブラルタルの基地に帰投し、ジブラルタル造船所で演習用の魚雷を陸揚し、通常型潜水艦「オラクル」から実弾を搭載替えすると共に<sup>555</sup>補給品の搭載を行った。「スパルタン」は平均速力23ノット(時速約41キロ)で南進し、フォークランド諸島沖に4月12日についた。

2隻目の原子力潜水艦「スプレンドイド」は北西海域での行動から呼び戻され、スコットランドのファスレーン基地で補給品および弾薬を十分に搭載した。結局、「スパルタン」は4月1日(木)に、「スプレンドイド」と同じ日に出港した。補給艦「オースティン」はすでにジブラルタルから3月29日(月)に出港していた。

その日のキャリントン外相とブライカー(Mr.Blaker)副国防相の合同議事録によれば、ジブラルタル沖で演習中の艦艇7隻を派出することは賢明ではないとしている。艦艇の派出は知られ、状況を緩和する外交努力を複雑にする。その程度の兵力では簡単にアルゼンチンの兵力の対抗に遭う。信頼できる兵力はもっと大きな兵力であるが、そのような兵力を編成してフォークランド諸島に着くまでには24日は要する。その上、そのような兵力を維持するのは難しく、費用がかかる。準備の点では、兆候はないが、アルゼンチン軍がフォークランド諸島への侵攻の準備を進めていなければ、秘匿することは無理であり、極めて挑発的となり事態をエスカレートさせるのではないかと懸念があった。そして、以後の調整は、4月1日の国防委員会の会議で議論されることとされていた<sup>556</sup>。

3月29日(月)の午後、ロンドン官庁街にある国防省で、リーチとその幕僚は、前の週に、ノット国防相が提示した選択肢を最新の情報および原子力潜水艦の派出を決定した観点から再検討を行った<sup>557</sup>。アルゼンチン海軍に対抗できる効果のある行動ができる任務部隊の派遣を要求された場合について検討した。アルゼンチン軍は水上、水中、航空能力のある相当な海軍を保有しているとみていた。そのなかにはイギリス海軍の主要な兵器と同じエクゾセ・ミサイルを少なくとも6隻の艦艇が装備し、ソナー探知が極めて

<sup>553</sup> Max Hastings, Simon Jenkins, *The Battle for the Falklands* (Pan Books, 2010), p.77.

<sup>554</sup> Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II: War and Diplomacy revised and Updated Edition* (London: Routledge, 2007), p.200.

<sup>555</sup> Max Hastings, Simon Jenkins, *The Battle for the Falklands*, p.77f.

<sup>556</sup> Lord Franks, *Falklands Islands Review* (HMSO 1983), p.64f(col.225).

<sup>557</sup> Max Hastings, Simon Jenkins, *The Battle for the Falklands*, p.78.

難しい2隻の潜水艦を含む4隻の潜水艦を保有し、そしてイギリスの艦艇および陸上兵力を攻撃可能な航空機を200機以上保有しているとみていた。8000マイルも遠方でそのようなアルゼンチン軍と対抗して作戦を遂行するのは戦略面およびロジスティクスで困難であり、当時のイギリス海軍が利用できる兵力では、アルゼンチン軍に海上から対抗するのは非常に危険であると判断し、空母、潜水艦、水陸両用兵力をはじめとする、可能なすべての資源を含まないような任務部隊は直ちに拒否することを決めている。

ここでリーチおよびその幕僚に注目すべき期待が生じたといった指摘がある<sup>558</sup>。非常に大きな敵であるアルゼンチン軍に対しては、本気で完全な戦闘艦隊を向かわせるという期待である。リーチが日頃主張してきた不測の緊急事態に対応できる海軍であった。このような編成は、これまでの海軍兵力の削減、そして昨年の国防政策見直しによる航空母艦、強襲揚陸艦など主要な海軍兵力が削減が実施されるたであろう、数年後であれば完全に不可能な考えであった<sup>559</sup>。つまり、この日からリーチによる大規模な任務部隊の派遣に関する戦略的議論が始まったという見方である。リーチは政治的な議論にも大きく関与した。このような行動の背景には南大西洋で展開されている事態により海軍の存在意義自体が問われているといった強迫観念に近いものがあったと断言している<sup>560</sup>。

また、同日(3月29日)からロンドン郊外のノースウッドにある艦隊司令部では、司令官の幕僚が予防的措置に取り組み始めていた。イギリス海軍は艦隊の迅速な動員およびその展開に関する手続き面の訓練を実施してから長く経過していなかったため、常駐の中核要因は勿論、増援要員も必要な手順を熟知していたようである<sup>560</sup>。4月1日に空母は出港の命令を受けてから48時間に出港できる態勢をとる命令が発せられた。「ハーミーズ」および「インヴィンシブル」は2月および3月の初めに大規模な演習で、「ハーミーズ」は海兵隊第40コマンド大隊の隊員を乗せ、強襲艦として行動し、29機のヘリコプターおよび5機のシー・ハリヤーを搭載していた。「インヴィンシブル」は通常搭載している9機の対潜ヘリのシー・キング Mk5 および5機のシー・ハリヤーを搭載して対潜空母として行動した<sup>561</sup>。海軍は、NATO 任務に派出しておた艦艇を任務部隊に編入するために、チャタム(Chatham)の予備艦隊(stanby-by squadron)の艦艇を代替として当てた<sup>562</sup>。

その日(3月29日(月))の夜、ロンドン郊外のノースウッドにある艦艇司令部はジブラルタル沖で行われている演習「SPRINGTRAIN」を視察中の艦隊司令官フィールドハウス海軍大将(リーチの直近の部下に当たる)に、南大西洋での状況が悪化していること、そして大規模な均衡艦隊(balanced fleet)の派遣が検討されていることを伝えた<sup>563</sup>。

演習中の第1艦隊から250マイルほどの海域で「グラモーガン」に乗船して視察していたフィールドハウスはこの連絡を受け、直ちに「アントリム」乗艦の第1艦隊司令官ウッドワード海軍少将を直ちに呼び

---

<sup>558</sup> *ibid.*, p.78.

<sup>559</sup> *ibid.*, p.78.

<sup>560</sup> David Brown, *The Royal Navy and The Falklands War*, (Leo Cooper Ltd., 1987), p.65.

<sup>561</sup> David Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, p.65.

<sup>562</sup> Charles W. Koburger, Jr., *Sea Power in the Falklands* (New York; Praeger Publishers, 1983), p.24.

<sup>563</sup> Max Hastings, Simon Jenkins, *The Battle for the Falklands*, p.79.

寄せた。フィールドハウスとウッドワードは3月30日(火)の朝0430から約1時間話し合い、大規模な任務部隊における第1艦隊の役割および南大西洋の作戦に関連して予想されることを議論した。フィールドハウスはウッドワードとの話し合いを終了し次第、ヘリコプターでジブラルタルに向かい、そこからロンドンに帰った。

第1艦隊は例年のNATOの演習「SPRINGTRAIN」に参加し、アフリカ北西部モロッコ、カサブランカ沖で2つの群に分かれ、無人航空機ドローン(drone)を目標としたシー・ダート・ミサイル射撃訓練を実施していた。訓練の最中に2日間、第1艦隊の幕僚は即応作戦態勢点検(Short Notice Operation Readiness:SNORC)の準備を行った。想定の緊急展開先を極東とした手続の訓練であった<sup>564</sup>。

翌日の3月30日の午後、国防省は防衛作戦執行委員会を招集した。この委員会は参謀長が軍事作戦の主要方針を決めるためのもので、会議の結果次のような案がノート国防相に提示された。水上艦艇の派出は挑発することになり、航空支援のための航空母艦が必要となるため反対。3隻目の原子力潜水艦の派遣は、長期の間、フォークランド諸島海域にプレゼンスを維持することは他の世界規模のコミットメントを満たす能力に深刻な影響を及ぼし、そして作戦面の損害を招くので反対というものであった。フォークランド諸島周辺海域は間もなく冬となりフォークランド諸島を効果的に強化する能力は制限される。会議に出席した外務連邦省の意見は、アルゼンチンが4月のいつの日か少なくともフォークランド諸島の1つの島を占領する計画を立てている兆候があるので1隻以上の原子力潜水艦を向かわせることに賛成した<sup>565</sup>。

2隻目原子力潜水艦の派出命令の承認は30日朝に決められており、3隻目の原子力潜水艦の派出が考慮事項となっていた。キャリントン外相から3隻目の原子力潜水艦の派出の要請を受け、派出される原子力潜水艦は「コンカラー」とまで決まっていた。しかしノート国防相は原子力潜水艦を3隻目の派出することは他の作戦に重大な影響を及ぼすとの懸念から出港の命令を出していなかった<sup>566</sup>。

国防省はこの3隻目の派遣は他の作戦の厳しい問題になるとことを懸念していた<sup>567</sup>。当時、イギリス海軍が実践配備していた原子力潜水艦は7隻しかなく、その任務は戦略抑止任務中のポラリス型原子力潜水艦の護衛および旧ソ連艦隊に関する情報収集であった。海軍側は「スパルタン」の派出のときでさえ重要と考える進入阻止作戦(an important counter-intruder operation)を中断されることに不満があった。対ソ対潜戦に関する重大な情報収集任務が危険にさらされるのではないかと考えていた<sup>568</sup>。

4月2日、0300、ウッドワードはノースウッドから演習に参加している艦艇から7隻を秘密裏に南方に向かわせる準備を行わせ、同海域に所在する艦艇3隻と後に合同せよという指示を受けた。この時点までに艦隊司令部は派出する艦艇を決めていた。フランス製のエクゾセ対艦ミサイルを搭載しているカウンティ級駆逐艦2隻(「アントリム」および「グラモーガン」、カウンティ級より近代的で外洋(open ocean)シー・ダート対空ミサイル装備の42型駆逐艦を3隻(「コンベントリー」、「グラスゴー」および「シェフィ

<sup>564</sup> Max Hastings, Simon Jenkins, *The Battle for the Falklands*, p.69.

<sup>565</sup> Lord Franks, *Falklands Islands Review* (HMSO 1983), p.64(col.224).

<sup>566</sup> Lord Franks, *Falklands Islands Review* (HMSO 1983), p.64(col.224).

<sup>567</sup> Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p.202.

<sup>568</sup> *ibid.*, p.202.

ールド)」、そして地点防空(point air defence)ミサイル装備の 22 型駆逐艦 (「ブリリアント」) およびフリゲート艦「アロー」であった。シー・ウルフ・ミサイルは航空母艦および兵員を輸送する艦船の近接防御に適していた。

夜明けから南方に向かうことになった艦船とイギリス本土に帰投する艦艇が組になり、帰国する艦艇は搭載していた予備品等を可能な限り南方へ向かう艦艇にジャッキステーまたはヘリコプターで移載された。リンクス・ヘリコプターは正規の手続きを経ることなく搭載替えされた<sup>569</sup>。すでに演習部隊から分離され、西インド方面における長期任務へと向かっていた「プリマス」は海図を受領するためにジブラルタルに帰投するよう命じられた。そして同日の夕刻にはフォークランド諸島に向けて先行していた艦艇と合同した<sup>570</sup>。こうして、翌日の 4 月 3 日 0230 には 8 隻の艦艇および補給艦「タイドスプリング」がフォークランド諸島に向かった<sup>571</sup>。

## 第 2 項 華やかな編成と進出 (Show of Force)

4 月 2 日 (金) 早く、首相公邸で行われた会議で任務部隊を出港させる権限を受けて国防省に戻ったリーチ第一海軍卿は待機させていた幕僚(Naval Operations Staff)に艦隊司令官に任務部隊を出港させる電報を発信する指示をし、艦隊司令官フィールドハウスに直接電話でそのことを伝えた。そのときのリーチの最大の懸念は、任務部隊が出港する前に政治的な決意が弱まることだった。作戦は閣議および議会では解かれていなかった。リーチはフィールドハウスに任務部隊を月曜日 (4 月 5 日) に出港させる必要があると伝えた。フィールドハウスはもう少し時間をもらえれば準備を相当改善できると進言したが、リーチは応じず、月曜日に出港する必要があることを繰り返した。フィールドハウスは理解した<sup>572</sup>。

4 月 2 日 (金) の 0945 の閣議で、サッチャーはアルゼンチンの侵略は差し迫っていることを伝え、ノットは大掛かりな水陸両用戦の任務部隊を非常待機態勢にしたことを報告し、キャリントン外相は継続中の外交に関する報告をした。4 月 2 日の 0830 までに、フォークランド諸島のイギリスの守備隊は上陸したアルゼンチン軍に降伏した。4 月 2 日の 1930、閣議は任務部隊の出港に合した。翌日の 3 日 (土)、サッチャーは下院で、昨日、フォークランド諸島がアルゼンチン軍の侵攻を受け軍事統制下に置かれたことを公表した<sup>573</sup>。

4 月 3 日 1030、国防省は任務部隊・艦隊司令官(Commander - in - Chief Fleet)に任務部隊の艦艇を可能な限り速やかな出港を命じた。第 1 陣の出港は 48 時間以内とされた。

ジブラルタルから秘密裏に南方に向かった艦船とは打って変わり、アルゼンチン軍によるフォークランド諸島占領から 3 日後の 4 月 5 日 (月)、イングランドの南岸にあるポーツマス港の基地で大衆に見送ら

<sup>569</sup> Max Hastings, Simon Jenkins, *The Battle for the Falklands*, p.70.

<sup>570</sup> *ibid.*, p.71.

<sup>571</sup> *ibid.*, p.69.

<sup>572</sup> Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p.72.

<sup>573</sup> Lord Franks, *Falklands Islands Review* (HMSO 1983), p.71f(col.251,256-259).

れる中、海兵隊員、海軍特殊舟艇部隊(SBS)および陸軍特殊空挺部隊(SAS)の隊員を乗せた空母「ハーミーズ」、「インヴィンシブル」は出港した。このようにイギリスは航空母艦の出港を大々的に宣伝することで、イギリスの決意を内外に示した。しかし、本土から出港した艦艇の中に国防省が出航を秘匿した艦船はあった。アルゼンチンによるイギリス軍の兵力見積もりに影響を与えるためである。航空空艦が出港した日に同じ場所から静かに出港し空母と合同した、「アラクリティ」および「アンテロープ」である。補給艦支援給油艦「ピアリーフ」、艦隊補給艦、「リソース」および補給艦「オルメダ」も同日出港した。

以上のようなイギリス国防省による欺瞞作戦とでもいうやり方は効果があった。翌日、イギリスの有名な新聞は任務部隊に編入された艦船名を掲載したが、実際に編入された艦船は網羅していたが、編入されていない7隻の艦船名も掲載していた。「力の誇示」は陸上兵力に関しても行われた。4月9日に徴用船「キャンペラ」に乗船して出港した上陸群の中心となる海兵隊の第3コマンド旅団の大半および陸軍の第3空挺大隊は大々的に見送られながら出発した。水陸両用群の旗艦となる強襲揚陸艦「フィアレス」は4月6日に出港した<sup>574</sup>。

### 第3項 空母戦闘群の行動

ジブラルタルから密かに南下したウッドワードは4月4日から乗艦していた「グラモーガン」で、4月14日にアセンション島を出発し、4月15日に華やかな見送りの中ロンドンを出港した空母部隊と合同した。「ハーミーズ」は「アラクリティ」の他に4月8日にアフリカ北西岸のカナリア(Canaries)沖からジブラルタルで補給を済ませてから出港していた「ブロードソード」および「ヤーマス」と一緒だった。「ハーミーズ」は4月16日昼前、アセンション島沖に投錨した。「ハーミーズ」はイギリス本土から最初にアセンション島に到着した艦艇となった。補給艦「オルメダ」は「アンテロープ」に先導され、5隻の兵站揚陸艇(Logistic Landing Ship : LSL)と共にアセンション島に向かっている「フィアレス」に兵員および物資の補給のため北上した。「インヴィンシブル」は機関関係故障のため遅れてアセンション島沖に投錨した<sup>575</sup>。4月16日、アセンション島のワイドアウェイク(Wideawake)基地と艦船の間で、全機種へのヘリコプターが使用され、搭載品移載のためヘリコプターによる移載 (Vertrep) が 220 回実施された<sup>576</sup>。

4月18日、ウッドワードの空母戦闘群は「ハーミーズ」での任務部隊の会議終了後、アセンション島を出港した。すでにアセンション島から出港していた2隻の艦艇部隊が作戦の一部を実施中であった。空母戦闘群はアセンション島を出港後、気象条件の許す限りシー・キング 5s、3機による対潜水艦前衛哨戒を実施した。艦艇は4月19日から戦闘配置(Action Stations)よりは緩やかな配置、防御当直(Defence Watches)態勢に移行した。「フィアレス」および後方支援上陸船は後続の水陸両用群の艦船を待ち、本土で搭載した搭載品の搭載替えおよび水陸両用作戦の事前訓練を行うためにアセンション島に残った。「ハーミーズ」は搭載してきた9機のシー・キング 4sのうち4機を水陸両用群の移送作業および訓練のために

<sup>574</sup> Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military, p.78.

<sup>575</sup> David Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, p.87.

<sup>576</sup> *ibid.*, p.87.

搭載を解除した<sup>577</sup>。

アセンション島を出港した日、補給艦「オルメダ」の潜水艦の潜望鏡の航跡を発見したという報告により、午前中いっぱい本格的な対潜戦が実施されることになった。「アラクリティ」および「ブロードソード」、3機のシー・キング対潜ヘリコプター、そしてアセンション島からニムロッド洋上哨戒機により実施された。南方で水中探知目標がしばらく捕捉されたが、後にクジラと判別されて対潜戦は終了した。出港を控えていた主隊は午後になってから出港、「インヴィンシブル」は対潜戦に従事していたシー・キングを収容した後、夕刻には後を追った。アセンション島を後にした計13隻の艦艇および4隻の補給艦は、3つの部隊に分かれ、行動の秘匿に努め無線封鎖を実施しつつ航行した。アセンション島を出港後の初期は、アセンション島から第42航空隊のニムロッド洋上哨戒機が上空から支援を提供した。ウッドワードの主隊は南アメリカ大陸の沿岸から600マイルは距離をとりながら南西の針路を進めた。

4月22日、ウッドワードはサウス・ジョージア島での「パラケット作戦」の状況から、南方に先行させている「ブリリアント」にサウス・ジョージア島に向かうよう命じ、「シェフィールド」艦長を残りの艦艇の部隊(Task Unit 317.8.2)の指揮官とした<sup>578</sup>。4月25日には「シェフィールド」の部隊はウッドワードの主隊に合同した。墜落したシー・キング4sの搭乗員を捜索していた「ヤーマス」および2隻の補助艦艇も主隊に復帰した。ウッドワードの空母戦闘群の主隊は、2隻の航空母艦、4隻の駆逐艦、4隻のフリゲート艦および3隻の支援艦からなる部隊となった。ウッドワードは集中的に防空態勢の訓練を実施した。この訓練は3日間行われたが、気象条件が悪くほんの部分的にしか訓練できなかった。4月27日は突風および海が荒れたため航空機は発艦できず補給作業は実施できなかった。この日、空母戦闘群は150マイルしか進出できなかった<sup>579</sup>。

4月28日、イギリス政府は、4月30日1100Z時（フォークランド諸島時間午前7時）以降、海上排除区域をフォークランド諸島の不法占領を支援するすべての艦船および航空機、軍民を問わず、フォークランド諸島の中心から200マイル以内で発見された場合は攻撃を免れない、という完全排除水域(Total Exclusion Zone: TEZ)へと強化することを宣言した<sup>580</sup>。28日の天気は多少回復したため防空訓練を実施した。24日から姿を見せていなかったボーイング707機が表れた。「ハーミーズ」は戦闘哨戒機を100マイル以上前方で警戒させていた。ボーイング707機は近接しなかった。

4月29日午後、サウス・ジョージア島での作戦を終えてきた「ブリリアント」および「プリマス」を合同し、特殊部隊（陸軍特殊空挺部隊(SAS)のD中隊、第2海軍特殊舟艇部隊(SBS))を「ハーミーズ」に移送した<sup>581</sup>。空母戦闘群はこの日の午後遅くから完全排除水域に入る前にすべての艦艇が最後の補給を実施した。ポート・スタンレーの東500マイルの海域であった。夕暮れから霧がかかり夜間は晴れることはなかった。深夜に東方から接近するボーイング707機があったが、100マイルまで接近する前に引き返し

<sup>577</sup> *ibid.*, p.91.

<sup>578</sup> David Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, p.110.

<sup>579</sup> *ibid.*, p.111.

<sup>580</sup> *ibid.*, p.111.

<sup>581</sup> *ibid.*, p.112.

た。洋上補給は翌日の午前9時ごろには終了した<sup>582</sup>。

洋上補給が終了したころ、戦闘空中哨戒中のシー・ハリヤーがレーダー探知目標を調査しアルゼンチンの大型トロール船(Narwal)を確認。同船の行動の様子から空母戦闘群の行動の情報を収集している船と思われた。30日の午後遅く、空母戦闘群「ハーミーズ」は完全排除水域に入るべく針路を西にとった<sup>583</sup>。

4月21日からアルゼンチンのボーイング707機が朝と夕に、空母戦闘群に飛来し任務部隊の位置情報の収集を始めていた<sup>584</sup>。シー・ハリヤーが130マイルから80マイルまでに接近したアルゼンチンのボーイング機を追い払うまでになっていた。イギリス軍の交戦規定(ROE)は、武装していない航空機に対する攻撃を許可していなかった<sup>585</sup>。イギリス政府は4月24日遅くアルゼンチンに、イギリス艦艇を偵察するアルゼンチンの航空機は、軍用機、民間機にかかわらず、今後、敵機と見なし撃墜されるであろうと警告するよになる。

4月24日には、サウス・ジョージア島海域で「パラケット作戦」に備えていた「エンデュアランス」にもボーイング707機と思われる航空機の接近があった。空母戦闘群の主隊はアルゼンチン本土から1,000以内の海域を航行、「エンデュアランス」は空母戦闘群の南南西1,100マイルにいた。アルゼンチン空軍の航空機は攻撃できる距離ではなかったが、イギリス軍はボーイング707機が収集した空母戦闘群および「エンデュアランス」に関する位置情報がアルゼンチン海軍に提供されることは避けなければならなかった<sup>586</sup>。4月23日の午後、西方から接近する探知目標に対してシー・ハリヤーが緊急発進した。アルゼンチンのボーイング707機ではなくDC-10であり、ブラジルの航空機であることが分かった。夕刻の早くに補給艦「オルメダ」との洋上補給中にアルゼンチンの偵察機が飛来したが、シー・ハリヤーが追い払っている<sup>587</sup>。

4月23日、イギリス政府は任務部隊へのアルゼンチン軍艦艇および航空機の接近は、任務部隊の任務の妨害する脅威と同然であるので適切なやり方で対処されると警告した<sup>588</sup>。

アセンション島を出港した空母戦闘群に対する緊急の補給品、郵便物そして重要な命令書などの輸送はアセンション島に展開していたニムロッド洋上哨戒機および輸送機ハーキュリーズが洋上に補給等を投下し、艦載ヘリコプターが回収するというやり方で行っていた。

4月23日、フォークランド諸島に近づいた空母戦闘群は補給作業を行った。「ハーミーズ」に配属された海軍航空隊(Fleet Air Arm: FAA)の第846飛行中隊の4機のシー・キング4sは、終日、補給艦と戦闘艦の間の補給品等の移搭作業を実施した。シー・キング4sは海兵隊のコマンド大隊用のヘリコプターであり重量物の輸送が可能なヘリコプターであった。天気が悪化し、1機のシー・キング4sが墜落した。空軍から海軍航空隊に配置されていたパイロットは救助された<sup>589</sup>。「ヤーマス」および艦載ヘリコプター、2隻の

<sup>582</sup> *ibid.*, p.112.

<sup>583</sup> David Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, p.112.

<sup>584</sup> Max Hastings, Simon Jenkins, *The Battle for the Falklands*, p.101.

<sup>585</sup> *ibid.*, p.101.

<sup>586</sup> David Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, 1987, p.111.

<sup>587</sup> *ibid.*, p.110.

<sup>588</sup> *The Falklands Campaign: The Lessons*, p.5.

<sup>589</sup> Max Hastings, Simon Jenkins, *The Battle for the Falklands*, p.102.



補助艦艇の計 3 隻が事故海域にとどまり翌日の日出まで捜索したが、搭乗員 1 名が発見されなかった。深夜から海域はアセンション島出港後初めての荒天となり捜索を難しくしていた。「コーポレート作戦」での最初の犠牲者となった。この日、任務部隊の全艦艇は時間帯の使用を世界標準時に変更した。

海上排除区域が完全排除水域に変更された翌日の 5 月 1 日の夜明け前、ウッドワードが指揮する空母戦闘群の 13 隻の艦艇は同海域に入った。同日朝 0423、アセンション島から来た空軍第 101 航空隊のバルカン戦略爆撃機 1 機がフォークランド諸島のポート・スタンレー空港を爆撃した。21 発の 1000 ポンド通常爆弾を投下した。空母戦闘群の航空母艦ではシー・ハリアーの発艦準備が完了していた。「ハーミーズ」よりレーダーが近代的で艦載機数の少ない「インヴィンシブル」は防空艦に指定され、同艦のシー・ハリアーは艦隊防空のために戦闘空中哨戒を提供する任務を担った。「ハーミーズ」の 12 機のシー・ハリアーはフォークランド諸島に対する爆撃任務を担った。夜明けに、「ハーミーズ」はフォークランド諸島から 70 マイルのところまで接近した。「ハーミーズ」の第 800 航空隊のシー・ハリアー全機は出撃し、東フォークランド島にアルゼンチン軍が設営したグース・グリーン基地、そしてポート・スタンレー空港のレーダー、防空施設、滑走路、飛行場の施設を攻撃した。フォークランド諸島への「ハーミーズ」の接近距離は、シー・ハリアーの兵装の重量、搭載燃料量と必要な滞空時間との関係からウッドワードが決めた距離である。攻撃を終えたシー・ハリアーを收容次第、空母戦闘群は敵から離隔するために東方に離れた<sup>590</sup>。

ウッドワードは駆逐艦「グラモーガン」、フリゲート艦「アロー」および「アラクリティ」の 3 隻の艦艇を分派していた。ポート・スタンレー周辺のアルゼンチン軍守備隊の陣地を攻撃するためである。「グラモーガン」は高速で沿岸から 12 マイルの海域まで接近し、荒天のなか砲撃を行った<sup>591</sup>。3 隻の艦艇による艦砲射撃は 1325 に終了したが、その時、アルゼンチン空軍のミラージュ III が 4 機西方から接近した。空母戦闘群の艦艇に西方に注意せよとの緊急信号が発せられ、戦闘空中哨戒の任務に就いていたシー・ハリアーは高度を下げて迎撃速度まで増速した。艦砲射撃任務を終了した 3 隻は、レーダー妨害用金属片 (chaff; チャフ) を発射し、全速力で東方に離隔したが、「グラモーガン」は後部甲板に 1000 ポンド爆弾による被害を受け、「アロー」は機関砲により煙突および乾舷に小被害を受け、乗組員 1 名が腕に負傷し、「アラクリティ」の艦載ヘリコプターは沿岸からと思われる機関砲による被害を受けた。戦闘空中哨戒中のシー・ハリアーは近接航空戦をすることなく帰投するミラージュ III を追跡して 2 機を撃墜した。残り 1 機はフォークランド諸島の守備隊の砲火により撃墜された<sup>592</sup>。

一方、対潜任務に就いていた「ヤーマス」および艦載ヘリコプターのシー・キングにソナーを水中に沈下させていた「ブリリアント」は、アルゼンチン軍の「キャンベラ」爆撃機が 2 機西方から接近して来るのを発見してチャフを発射して対応した。数分後、シー・ハリアーが「キャンベラ」1 機を撃墜した。もう 1 機の「キャンベラ」は引き返した。その後、アルゼンチン軍の反撃はなかった<sup>593</sup>。

<sup>590</sup> *ibid.*, pp.180-182.

<sup>591</sup> *ibid.*, p.182.

<sup>592</sup> Max Hastings, Simon Jenkins, *The Battle for the Falklands*, p.183f.

<sup>593</sup> *ibid.*, p.184.

イギリス軍による以上の攻撃は、アルゼンチン軍を挑発して、アルゼンチン軍に反撃させことが目的であったという。イギリス軍、アルゼンチン軍は相互に相手の態勢を確認することになった。「グラモーガン」艦長は「アルゼンチン軍が本気だということを十分確認した。」との認識を示していた。イギリス軍はアルゼンチン軍機が正確に爆弾を投下できることを確認し、以後、昼間に艦砲射撃を実施させなかった。同日夕刻 2040 に「グラモーガン」は再度艦砲射撃実施のために指定された海域へ向かった<sup>594</sup>。

「シェフィールド」の沈没からサン・カルロスでの本格的な上陸までの間、ウッドワードは最終的上陸のための条件作りに努めた。ウッドワードは自己の裁量の範囲内で上陸作戦に不可欠なフォークランド諸島内の偵察および排除水域の実効性の確保を行った。当初、白昼、沿岸付近でスタンレー飛行場の使用阻止に努めたが、「グラスゴー」が被害を受けた後は、夜間に限り実施している。夜間に継続して艦砲射撃、爆撃、照明弾射撃を行い、アルゼンチン軍を不眠状態にすることに努めたという。

5月10日には、ウッドワードはフォークランド水道内の機雷の敷設状況を「アラクリティ」に確認させている。ウッドワードは4月中旬にアルゼンチンがスタンレー沖(Cape Pembroke)に機雷を敷設していたことから(「スパルタン」が発見し報告していた)、フォークランド水道にアルゼンチン軍が機雷を敷設している可能性を非常に懸念していた<sup>595</sup>。陸軍の特殊空挺部隊(SAS)から機雷の敷設はないという報告はきていた。この報告の確認のために、掃海艇および掃海装備を保有していないウッドワードは3,000クラスの小型の21型フリゲート艦「アラクリティ」にフォークランド水道の機雷の状況を確認させることにした。「アラクリティ」が触雷した場合に備えて「アロー」をフォークランド水道の北側の入口に待機させた。

「アラクリティ」は5月10日の朝遅く、激しい雨の中、空母戦闘群から分離され、夜間の最高潮の時期を選び、2300Z時にフォークランド水道の北側の入口から水道に入った。完全音響管制で総員配置に就き、5ノットの速力で、キャビテーションを最低に抑えて通峽を始めた。通峽の途中、ノース・スワン・アイランド(North Swan Island)で確かなレーダー映像を感知した。「アラクリティ」は増速して目標に接近した。目標は西フォークランド島のハワード港(Port Howard)に向かった。「アラクリティ」の照明弾照射は失敗したが、射撃は命中して目標は爆発した。「アラクリティ」はハワード港のアルゼンチン守備隊が警戒態勢に入ったと判断し、生存者の捜索は賢明ではないと判断し、速やかに水道を北上して、翌日0230Z時に水道の北側の入り口を出た<sup>596</sup>。機雷が敷設されていないことが確認された。通峽後も「アラクリティ」は「アロー」と共に機雷の敷設状況を確認した。その際、両艦はアルゼンチンの209型潜水艦「サン・ルイ」が哨戒していた海域を通過していた。「サン・ルイ」は魚雷を発射したが、魚雷の誘導装置の不調により命中はしなかったという<sup>597</sup>。「アラクリティ」がフォークランド水道を通峽中に攻撃した目標は、

<sup>594</sup> *ibid.*, p.184.

<sup>595</sup> Admiral Sandy Woodward with Patrick Robinson, *One Hundred Day - The Memoirs of the Falklands Battle Group Commander* (Harper Press, 2012, first published in 1992) (HaperCollinsPublishers, 1992), p.279f.

<sup>596</sup> Captain Chris Craig, *Call for Fire: Sea Combat in the Falklands and the Gulf War* (London: John Murray, 1995), pp.76-82., Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.429.

<sup>597</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.429.

翌日、アルゼンチンの輸送船 *Isla De Los Estados* であることが明らかになっている。*Isla De Los Estados* は、首都スタンレーから西フォークランド島のハワード港のアルゼンチン守備隊へ補給品を輸送していた。

## 第2節 イギリス軍の潜水艦の運用と交戦規則(ROE)

イギリス海軍はフォークランド戦争で最終的に6隻の潜水艦を投入した。原子力潜水艦5隻および通常動力(ディーゼル推進)潜水艦1である。これら潜水艦に対する作戦統制はイギリス本土(ノースウッドの任務部隊の司令部)が行った。南大西洋に派遣された各潜水艦は各任務部隊(Task Force324:TF324)になり、それら潜水艦で潜水艦群(Task Group 324.3:TG324.3)が編成された。任務部隊司令官フィールドハウス海軍大将の下、潜水艦隊司令官のハーバート中将(Flag Officer Submarines: FOSM, Vice Admiral Peter G M Herbert)が潜水艦群の指揮官として戦争終了まで潜水艦を直接作戦統制した。このような潜水艦に対する指揮関係は最後まで変更されることはなかった。その理由をイギリスの公式戦史は、司令部は冷戦における作戦を想定していたが、戦闘群の指揮官にそのような役割は望まれていなかったこと、イギリスの最終兵器である原子力潜水艦の使用は、政治的に論争の可能性に満ちていたため、原子力潜水艦を中央の統制下の置くことが不可欠だと思われたと記述している<sup>598</sup>。

原子力潜水艦は隠密性が高いため、サウス・ジョージア島での緊張状態の段階から、外交交渉への悪影響を及ぼす行動を避けたイギリス政府が予防的に先行展開させた兵力である。イギリスは原子力潜水艦がフォークランド諸島周辺海域に到着した時にフォークランド諸島周辺海域に海上排除区域(MEZ)を設定した。そして空母戦闘群が同海域に到着後には、海上排除区域をアルゼンチン航空機も対象とする完全排除水域(TEZ)に強化した。

原子力潜水艦「スパルタン」はジブラルタルで補給品および魚雷を搭載して、4月1日出港した。原子力潜水艦「スプレンドイド」も同本土のファスレーン(Faslane)を出港した。原子力潜水艦「コンカラー」は、海兵隊の特殊舟艇部隊(SBS)隊員を乗船させて4月4日にファスレーンを出港した。政府が原子力潜水艦の派出を選択した理由の第1はアルゼンチンを挑発しないで行動できることであったため、政府は原子力潜水艦の行動を公表しなかった。しかし、南大西洋での対応に原子力潜水艦の派出を望む議員やマスコミ関係者を安全させようとしたキャリントン外相は軍事的な行動には言及しなかったものの「断乎とした行動」とられているとの発言が憶測を呼ぶことになり、翌日の3月31日(水)には原子力潜水艦が派出されたという憶測がマスコミ全体に広まっている<sup>599</sup>。

3月26日、「スパーブ」が演習「SPRINGTRAIN」からはずされジブラルタルを出港した。マスコミでは「スパーブ」は南大西洋へ向かったと見なされ、進出中であるといった報道がされた(イギリスの一般紙『デイリー・テレグラフ』紙(The Daily Telegraph)の朝刊(1982年3月31日付))。「スパーブ」の報

<sup>598</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, pp.31-33.

<sup>599</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.203.

道に関しては、その情報源がイギリス国防省の潜水艦乗だったという指摘がある<sup>600</sup>。) 実際には「スパーブ」は南大西洋での作戦とは全く関係のない別の作戦のために出港していた。「スパーブ」は4月16日に本土のファスレーンに帰投していた。国防省は「スパーブ」のファスレーンへの帰投を帰投後数日間公表しなかった<sup>601</sup>。

4月1日に出港した原子力潜水艦に対する交戦規定(ROE)は、極秘裏に移動することの重要性、別令あるまでアルゼンチン兵力を監視することが強調されていた<sup>602</sup>。自艦、氷海警備船「エンデュアランス」および他のイギリス艦艇を防衛する際には最小限の武力の行使が許可されていた。もし、「エンデュアランス」が潜在的な威嚇により停船を強いられた場合には、アルゼンチン軍にイギリスの原子力潜水艦の存在を明かすことは認められていた。仮に交戦状態となった場合には原子力潜水艦は必要最低限な範囲で攻撃を止めるための反撃が許可されたい<sup>603</sup>。

このように、原子力潜水艦を展開させたのは、アルゼンチン軍を威嚇することが目的でなく、アルゼンチン海軍の攻撃的な活動に対抗する活動を支援することにあつた。原子力潜水艦はアルゼンチン艦艇の行動に関する情報を収集し通報でき、万が一必要な状況が生じた場合には沈没させることができるように魚雷を装備していた。しかし、いったん南大西洋海域入ればその存在を明らかにする。その時、原子力潜水艦は「エンデュアランス」に対する攻撃を抑止するうえで強力な存在になる。また、フォークランド諸島への海上からの侵略に対して強力な抑止力になるという考えであつた<sup>604</sup>。

ほかの潜水艦は、5月の中旬(10日、12日)に作戦海域に向かった。2隻の原子力潜水艦(「バリエント」、「カレージャス」)および1隻の通常動力の「オニクス」である。「バリエント」は5月16日に南大西洋海域に入った。

「バリエント」は、6月8日、アルゼンチン本土のリオ・グランデ(Río Grande)基地からフォークランド諸島に向かうアルゼンチン軍機を発見し、フォークランド諸島で作戦中の任務部隊に報告した。このアルゼンチン軍機はフィッツロイで上陸中のイギリス艦艇等を攻撃した。

理由は明らかではないが通常動力の潜水艦(「オニクス」)の派遣は遅れた。特殊部隊の作戦のために4月18日に「オニクス」の南大西洋への派遣が決まった。4月26日には出港、5月31日にはサン・カルロスに着く予定であつた。フォークランド諸島への本格的な上陸作戦の実施日には間に合わなかつた。原子力潜水艦はすでにフォークランド諸島周辺海域に展開されていたが、サン・カルロスのような浅海域では原子力潜水艦は海軍特殊舟艇部隊(SBS)を陸上に潜入させる活動には向いていないなかつた<sup>605</sup>。原子力潜水艦はアルゼンチン海軍の阻止および情報収集・監視任務を行っていた。フォークランド水道の水深は50メートル未満、フォークランド諸島の周辺海域の水深は200メートル未満である。「オニクス」は5月31

<sup>600</sup> *ibid.*,p.30.

<sup>601</sup> David Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, p.67f

<sup>602</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*,p.202.

<sup>603</sup> *ibid.*,p.202.

<sup>604</sup> *ibid.*,p.202f.

<sup>605</sup> Michael Clapp, Ewen Southby-Tailyour, *Amphibious Assault Falklands: The Battle of San Carlos Water* (Barnsley, South Yorkshire: Pen & Sword Military, 2007, first published in 1996),p.102.

日深夜フォークランド水道の北のエディストーン・ロック(Eddystone Rock)沖で「アヴェンジャー」と会合後に護衛されて深夜過ぎに「フィアレス」に横付けした<sup>606</sup>。ポート・スタンレーへの最終攻撃は6月11日から12日にかけての深夜に行われたが、この攻撃準備のために、「オニクス」および本土から来ていたトロール船が海軍特殊舟艇部隊(SBS)および陸軍特殊空挺部隊(SAS)をスタンレー北部または西フォークランド島に潜入させた。トロール船の船尾のすべりはゴム・ボートまたは急襲揚収艇に適していた。通常動力の潜水艦およびトロール船により特殊部隊を陸上に潜入させることができたことは、夜間暗視装置を装着し最前線近くまで飛行する必要があったシー・キングの負担を軽減させた<sup>607</sup>。

4月上旬に出港した3隻の原子力潜水艦は4月11日に南大西洋の海域に入った。「スパルタン」はフォークランド諸島の首都スタンレー(東フォークランド島)に接近する目標の監視を、「スプレンドイド」はアルゼンチン本土沿岸からフォークランド諸島の海域の哨戒を開始した<sup>608</sup>。翌日の4月12・13日深夜(ブエノスアイレス時間)、イギリス政府はフォークランド諸島の中心から200マイルに海上排除区域(Maritime Exclusion Zone: MEZ)を設けたことを宣言し、同海域内を航行するアルゼンチン軍の艦艇および商船は自船の責任で航行するように警告した。原子力潜水艦はすでにフォークランド諸島周辺に設定したMEZの海域に入っていたが、封鎖水域を通り抜ける小型の高速艇に対処しなかった。民間の船を無警告で攻撃することはできず、警告することもできなかった。原子力潜水艦は警告するためには露頂する必要があり、その時、原子力潜水艦は自艦の位置を暴露してしまう危険があったためである<sup>609</sup>。

アルゼンチンは4月7日にイギリスから(ブエノスアイレスのスイス大使館経由で<sup>610</sup>)海上排除区域を設定する知らせを受けた後、アルゼンチン本土沿岸およびフォークランド諸島沿岸から200マイルの海域に解除区域とすることを宣言した<sup>611</sup>。イギリスの排除水域はフォークランド諸島の中心から200マイルであったが、アルゼンチンが設定した海域は沿岸から200マイルであったため、アルゼンチンフォークランド諸島周辺海域に設定した排除水域はイギリスの海上排除区域よりも60マイル広い海域が排除としていた。

フィールドハウスは4月4日、アルゼンチンがフォークランド諸島の守備隊を増強するのを阻止するために海上排除区域の設定を進言、4月5日に各参謀長との会議でとりあげられた軍側が提案した方策である。フィールドハウスがMEZの設定を求めたのは4月11日に原子力潜水艦「スパルタン」が海域に入る前までにどのような事態にも十分に備えなければならないという考えからであった。

イギリス外務連邦省の法務担当の顧問は公的声明の中で、そのような措置を「封鎖」(blockade)と述べ

---

<sup>606</sup> *ibid.*, p.209.

<sup>607</sup> *ibid.*, p.253.

<sup>608</sup> Middlebrook, *The Falklands War, Pen & Sword Military*, 2012, p.97.

<sup>609</sup> David Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, p.84.

<sup>610</sup> ジュネーブ諸条約は、人道法の適用を確保する方法の一つとして紛争当事国以外(中立国)の利益保護国による人道法適用の監視および協力を前提としている。人道法の適用確保における「利益保護国制度」である。フォークランド戦争は、当該制度をはじめて活用したケースである。イギリスはスイスをアルゼンチンはブラジルをそれぞれの利益保護国に指名している。(藤田久一『国際人道法』(新版)有信堂高文社、1993年、188頁)

<sup>611</sup> Admiral Sandy Woodward with Patrick Robinson, *One Hundred Day*, p.109.

ることに強く反対している<sup>612</sup>。国際法において、「封鎖」は、宣戦された、または戦争と認められた状態と密接に関係しているとの理由からであった。国際連合アルゼンチン大使は、4月9日、イギリスが宣言した海上排除区域を「封鎖」と呼び、国際連合総会決議第3314<sup>613</sup>第3条の(c)で規定された「侵略行為」であると非難している<sup>614</sup>。アルゼンチンの非難に対して、イギリスは、イギリスは最初に武力を用いておらず、自国の領土を封鎖することはできないと反論している<sup>615</sup>。

最も早い交戦規定(ROE)の作成方法は、冷戦の間、作成されテストされてきたものである。しかし、これは、環境が全く異なることから、独自のROEが必要であると、各軍の参謀長は判断している。それは、原子力潜水艦は単独の最終兵器であるという特徴からであり、他の水上艦艇に適用すべき交戦規定(ROE)に合わせる必要はないという結論から、原子力潜水艦だけに適用される多くの交戦規定(ROE)となった。輸送する商船に対する無制限攻撃により戦闘を開始することは、難しいとの判断から民間の目標だけが対象から外されることになった。このため、フォークランド諸島へのアルゼンチン軍の補給線を遮断することはできなくなった。原子力潜水艦は指定水域内の商船の識別も引き返らせることもできない。

なお、イギリス外務連邦省の法務担当の顧問は「水域」を設定するに先立ち適切な警告を与える重要性を強調している。そして、多様な艦船および航空機の立場を区別する重要性も強調した。顧問は次の3つに区分したものを提案していた。

- ① 水域に入るまたは水域内のすべてのアルゼンチンの艦艇 (warships) と軍用航空機は敵として取り扱われ、適正な兵力がしかるべく用いられる。
- ② 水域に入るまたは水域内の他のアルゼンチンの船舶または航空機はアルゼンチン軍または艦艇に補給する目的で行動しているものと判断させる。
- ③ 軍用または民用であろうと、他国の船舶または航空機に関し、イギリス海軍はアルゼンチン軍またはアルゼンチンの艦艇に補給させないことを確保するためにあらゆる適正な手段を採る、である<sup>616</sup>。

そして目的を達成するために必要な武力を用いられるべきではない。非武装の商船や航空機が攻撃されるのは、船舶が水域に入るのをまたは水域から立ち去ることを説得するすべての手段が尽きた時に、最後の手段として、攻撃が行われることを指摘している。

<sup>612</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.87f.

<sup>613</sup> 国連総会決議 3314 号 (United Nations General Assembly Resolution 3314 on the Definition of Aggression)。1974年12月14日の国際連合総会(第29回)で採択された侵略の定義に関する決議。第3条は「侵略行為」に関する条文であり、「次に掲げる行為は、いずれも宣戦布告の有無に関わりなく、第2条の規定に従うことを条件に、侵略行為とされる」と規定した。アルゼンチンが取り上げた(c)では、「一国の軍隊による他国の港または沿岸の封鎖」と規定されている。

<sup>614</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.801.

<sup>615</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition : War and Diplomacy* (London; Routledge, 2007), p.801.

<sup>616</sup> *ibid.*, p. 88.

ルウィンが認識したように「排除水域」は後に問題を生起した。排除水域に対する公的な認識は戦いのための水域の一種である。つまり、水域内では戦闘が行われるが、水域の外は、すべての者の避難所であるというものである。このような認識は避けがたく、実際、交戦規則（ROE）において熟考され、区域の外よりも水域の方に自由裁量を多く与えた<sup>617</sup>。

イギリス政府は4月7日にフォークランド諸島の中心から200マイルにアルゼンチン軍の艦艇および補助艦艇の対象とする排除水域を4月12日の0400Z時から設定することを公表した<sup>618</sup>。イギリス国防省のノット国防相の声明は次の内容であった。

「示された日時から、この水域内で発見されたアルゼンチンの艦艇、アルゼンチン海軍の補助艦艇は敵として扱われ、イギリス軍よる攻撃の対象となる。この方策は、国際連合憲章第51条に基づく、自衛のための権利を行使するために必要な追加の手段を排除するものではない」

イギリスの戦時内閣は、4月8日、原子力潜水艦用の交戦規定(ROE)を是認した<sup>619</sup>。この交戦規定(ROE)はルウィンが法務担当の顧問を含む外務連邦省の幹部、国防省、内閣官房と協議して作成したものである。

排除区域(EZ)内で、識別を確実に実施した結果により、アルゼンチンの艦艇、アルゼンチン海軍の補助艦艇を攻撃できる。最初の攻撃が成功したら、原子力潜水艦は現場海域から離れ、報告する。原子力潜水艦は攻撃を報告した後、または、12時間後に報告できない場合、哨戒の継続が認められる。状況報告(Situation Reports)は次の攻撃の成功後、探知したすべてのアルゼンチンの兵力について、可能な限り速やかに、艦長所定により行うものとされた。逆に、原子力潜水艦が攻撃された際、排除水域(EZ)の内外で自衛のため必要ならば報復することが認められる。

潜水艦乗りは提案された交戦規定(ROE)を極度に用心深く判断している。原子力潜水艦乗りによる最も顕著な助言は、攻撃前にアルゼンチンの潜水艦を積極的に識別すべきというものであった。このようなことを敵潜水艦を識別中に行えば、原子力潜水艦自身が逆に捕捉されて攻撃される危険がある。このことに関し最も困難点は、水域内に存在するかもしれない他国の潜水艦に関する情報であった。仮に旧ソ連および南アメリカ諸国に通常型の潜水艦を戦闘区域(combat zone)に立ち入らせないことで説得できれば、探知された通常動力型の潜水艦がアルゼンチンの潜水艦と見なすことができ、攻撃できる。交戦規定(ROE)は4月10日までに修正された。

以上のような経緯を経て、4月12日、原子力潜水艦「スバルタン」が排除水域(EZ)に入り、原子力潜水艦に対する交戦規定(ROE)は発動になった。4月15日、引き続き、原子力潜水艦「スプレンドイド」が排除水域(EZ)に入った。原子力潜水艦は、4月13日、アルゼンチンの艦艇の脆弱性についてアルゼンチンに

<sup>617</sup> *ibid.*, p. 88.

<sup>618</sup> John Fieldhouse, "Despatch by Admiral Sir John Fieldhouse, G.C.B., G.B.E., Commander of the Task Force Operations in the South Atlantic: April to June 1982," p.16112.

<sup>619</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.91.

政治的な要求があれば、初期攻撃に必要な条件がある、という警告を受けている。「スパルタン」は東フォークランド島の近くを、「スプレンドイド」はアルゼンチン本土の港湾とフォークランド諸島の間になる海上排除区域の北方の哨戒水域に就いた。

イギリスの公式戦史は政治と軍事の調整は交戦規定(ROE)に関する議論で行われたと記述している<sup>620</sup>。つまり、交戦規定(ROE)は政治と軍事の接点における媒介の機能を果たした。交戦規定(ROE)は閣僚に8000マイル以遠における複雑で危険な軍事作戦を政治的に統制する手段を与えた。次の3つの幅のある原則が戦略上の矛盾を両立させる役割を果たしたという。

1つ目は、十分な軍事的な圧力が外交を成功させるためのコンディション作り、そうでなければフォークランド諸島再占領を成功させるためのコンディション作りのために、アルゼンチンに対し行使する。2つ目は、軍事行動は慎重に判断されるか、または国際法に違反することになる軍事行動は避けなければならない。3つ目の原則は、任務部隊の損傷を最小限にとどめるである。

フォークランド戦争の早い段階で、ルウィンはノットに交戦規定(ROE)を次のように説明している<sup>621</sup>。交戦規定(ROE)は認められた行動の限界を正確に規定し、同時に、規定に基づき達成される目的の達成のため現場の指揮官に最大限の自由を与えなければならないと。このような交戦規定(ROE)の特徴からか、フォークランド戦争後、ある上級指揮官の交戦規定(ROE)に関する評価として次のようなものがある。

交戦規定(ROE)は、多くの場合、理解が困難で、回りくどかった。ある規定は寛大な例外を除き制限的で、他の規定は逆であったという。正確な規定ほどその規定だけでなりたつ、他の規定は他のすべての規定を制限する。これらの違いを言葉から見分けるのは常に容易ではない。不明瞭な命令の特徴として説明が必要となる。

完全排除水域(Total Exclusion Zone: TEZ)の設置はフォークランド諸島の首都であるポート・スタンレーとフォークランド水道を担当する原子力潜水艦が担った。イギリス、アルゼンチンとも最後まで宣戦布告(declaration of war)を最後までしていない。

「コンカラー」はサウス・ジョージア島に向かい、4月19日にはサウス・ジョージア島北部に海兵隊の特殊舟艇部隊(SBS)の偵察中隊を上陸させた。4月23日、「コンカラー」はアルゼンチンの潜水艦がサウス・ジョージア島に向かっているとの情報を得て索敵したが探知することはできなかった。4月28日まで、サウス・ジョージア島で作戦を遂行した後、「コンカラー」は4月30日にフォークランド諸島周辺海域の新たな指定された担当海域に入った<sup>622</sup>。「スパルタン」は4月中旬にアルゼンチン海軍のLST Cabo San Antonioが4日間連続で、スタンレー沖(Cape Pembroke)で機雷を敷設しているのを発見したが、攻撃許可は下りなかった<sup>623</sup> (アルゼンチンは機雷の敷設を公表している)。このアルゼンチン軍側の機雷原の目的は、ポート・スタンレー空港に対し艦砲射撃を行うために接近するイギリス艦艇を阻止することおよび

<sup>620</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.86.

<sup>621</sup> *ibid.*, p. 87.

<sup>622</sup> Middlebrook, *The Falklands War, Pen & Sword Military*, 2012, p.147.

<sup>623</sup> *ibid.*, p. 98.



アルゼンチン軍が実施したことと同様の上陸作戦させないことを目的したようである<sup>624</sup>。「スパルタン」は4月29日にはフォークランド諸島の北方約300マイルにアルゼンチン軍海軍の42型駆逐艦などを確認している。

空母戦闘群が海上排除区域に入る前の数週間、戦時内閣と参謀本部との間で、アルゼンチン艦隊の所在を探索させるために、原子力潜水艦をアルゼンチン本土の沿岸にどこまで近接させるかが議論された。この段階におけるウッドワードの優先事項はアルゼンチンの主要兵力の所在の探索および追跡であった。海軍は可能な限り正確なアルゼンチン艦艇の位置情報を欲していた。原子力潜水艦が海上排除区域にとどまる限り、イギリスの水上部隊を攻撃可能な位置まで接近できる可能性があるとの考えからであった。しかし、外交面での態勢が整う前にアルゼンチン本土まで数マイルの近海で原子力潜水艦を行動させることは破滅的な事態を引き起こす結果にならないかといった懸念があった。しかし、4月の下旬には、戦時内閣は態度を軟化した<sup>625</sup>。

4月26日に交戦規定(ROE)が変更され、すべての任務部隊の周辺の防衛地域(defence area)を含むように拡大された。以後、「スパルタン」は海上排除区域内にとどまったが、「コンカラー」の哨戒水域は北方からフォークランド諸島の南西の海上排除区域の外側の海域に変更された。「スプレンドイド」は受け持ちの哨戒水域の北方を哨戒を始めた。この時期における原子力潜水艦の主任務はアルゼンチン海軍の2隻の209型潜水艦の探知および破壊であった<sup>626</sup>。戦時内閣およびウドワーは少なくとも209型潜水艦1隻は海上排除区域内で作戦行動に就いているものと考えていた<sup>627</sup>。

ノースウッドは「スプレンドイド」に24時間ほど42型駆逐艦の艦隊を追跡させた後、追跡を止めさせ空母を探索させるために北方に移動させた。ノースウッドは巡洋艦「ヘネラル・ベルグラノー」、特に航空母艦「ベインティシニコ・デ・マヨ」の所在情報を欲したためである<sup>628</sup>。「コンカラー」は南方での捜索を続けた。5月1日の午後、「コンカラー」はアルゼンチンの巡洋艦「ヘネラル・ベルグラノー」および2隻のエクゾセ・ミサイル搭載駆逐艦を確認した。

4月26日、「スプレンドイド」は2隻の42型駆逐艦およびエクゾセ・ミサイル搭載フリゲート艦からなるアルゼンチン艦隊が10ノット<sup>629</sup>(時速約19キロ)で沿岸沿に沿って南下しているのを確認して、ノースウッドに報告した。報告を受けたノースウッドは「スプレンドイド」に追跡を継続するよう命じた。

潜水艦乗りであり、潜水隊を指揮した経験もあるウッドワード少将(空母戦闘群指揮官)は、南大西洋海域に投入された原子力潜水艦の艦長と十分な面識があり、ノースウッドによる潜水艦の運用の方法、指揮系統の変更を望んでいた<sup>630</sup>。ウッドワード少将は、南大西洋海域に進出し、ノースウッドから直接作戦統制を受けている3隻の原子力潜水艦を自分の指揮統制下に置くことを強く望んでいた。ウッドワードは、

<sup>624</sup> David Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, 1987, p.84f.

<sup>625</sup> Middlebrook, *The Falklands War; Pen & Sword Military*, 2012, p.185.

<sup>626</sup> Max Hastings, Simon Jenkins, *The Battle for the Falklands*, p.185.

<sup>627</sup> *ibid.*, p.185.

<sup>628</sup> *ibid.*, p.185.

<sup>629</sup> 1ノット(Knot:Kt) = 1.852 km/h

<sup>630</sup> Admiral Sandy Woodward with Patrick Robinson, *One Hundred Days*, pp.171-173.

そもそも、当初からそのつもりで、作戦水域に投入される潜水艦兵力の調整官役を担わせるために、旧知の部下（大佐）を「ハーミーズ」に乗艦させてきていた。ウッドワードは極めて早い行動が欠かせない急速な状況変化への対処が必要となった場合を考え、作戦海域の潜水艦を自分の作戦統制下に置くべきであると考えていた。そして、ウッドワードが旗艦として乗艦していた「ハーミーズ」は作戦水域の潜水艦を作戦統制するのに必要な通信回線をすべて装備していた<sup>631</sup>。

ウッドワードは潜水艦の運用方法も変更することを望んでいた<sup>632</sup>。南大西洋海域での作戦環境にあわせての変更が必要と考えたためである。主要な任務が対潜戦である北大西洋海域の北方での NATO の作戦では、極めて多数の敵味方の艦艇、航空機、潜水艦が行動するため、作戦海域を分割して行動するするようにしていた。潜水艦は分けられた海域に配置され、配置された潜水艦にいわゆる「担当地区」(patch)を持たせていた。そして、各担当区域の潜水艦は、味方を攻撃する(Blue on Blue)機会を最小限にするために、他の区域に立ち入ることは許されていなかった。また艦艇および航空機もその区域で潜水艦を探知したとしても攻撃することは許されなかった。もし探知目標が敵の潜水艦だと明確に識別できれば別であるが、そのような識別は最良の状況でも容易なことではなかったためである。以上のように北大西洋の北方における NATO の作戦においては、味方の潜水艦を担当海域に分けて行動させて、敵と間違いないと確信した目標に対してだけ攻撃が許されるというものであった。

ウッドワード少将は以上のような運用方法は、南大西洋海域でのアルゼンチン海軍の潜水艦には当てはまらなないと考えた。アルゼンチン海軍は通常動力型の潜水艦を 4 隻しか保有しておらず、そのうちの 1 隻「サンタ・フェ」はサウス・ジョージア島での「パラケット作戦」でグリトヴィケンにて発見し撃破していた。「サンタ・フェ」と同型艦の「サンチアゴ」の艦齢も 50 年程度との見積もりからすでに稼働状態ではないと考えていた。残る 2 隻のドイツ製の 209 型の小型で通常型の潜水艦（「サン・ルイ」および「サルタ」）は外洋航行向きではなかったため、沿岸で活動するものと考えた。つまり、仮に 209 型の潜水艦が 2 隻とも稼働状態であったとしても、機動的な任務は付与されず、沿岸海域、たとえばポート・スタンレー付近の哨戒任務に就くであろうと予想していた。ポート・スタンレーはイギリスの艦艇を発見する可能性の高い海域であったためである。以上のような考えから主にアルゼンチン艦艇の活動を阻止するイギリスの原子力潜水艦にとって、アルゼンチン海軍の潜水艦は脅威でないと考えた。

以上のような考えから、ウッドワード少将は、水中探知目標に対する攻撃を禁止するという条件で、原子力潜水艦を別々の海域に分けて行動させるのを止め、アルゼンチン海軍の艦艇に張り付け、イギリス政府から攻撃許可を得たときに攻撃できるようにすべきと考えた。

しかし、以上のような、南大西洋における潜水艦に対する作戦統制および潜水艦の運用法を変更するというウッドワード少将の考えは、多分に政治的な理由からか、ノースウッドの司令部に認められなかった

---

<sup>631</sup> *ibid.*, pp.171f.

<sup>632</sup> *ibid.*, pp.172.

633。任務部隊司令官のフィールドハウス海軍大将もノースウッズの司令部で潜水艦の指揮統制を行っていたハーバート中将とも潜水艦乗りである。ウッドワード少将は上位者に対し自分の主張を続けることはしなかったという<sup>634</sup>。

潜水艦の哨戒水域を区分するのを止めて自由に搜索させることを要望した。アルゼンチン海軍の水上艦艇の搜索、攻撃させるために、空母戦闘群のと共に行動させることを望んだ。味方撃ちを避けるために、潜水艦は水中探知目標へ攻撃を許可されない。イギリスの潜水艦の行動は深度による分離を行えば良く、そのような運用は難しくはないので、アルゼンチン海軍の水上艦艇の搜索および攻撃に潜水艦を自由な行動を与えられるようになることがこそ重要と考えた。

4月28日までにフォークランド諸島の周辺海域を広範囲に4つの象限(quadrants)に区分し、「スパルタン」は北西の象限、「スプレンドイド」は北東象限、「コンカラー」は南西および南東の象限を担当するようになっていた。北の象限の担当になった「スパルタン」と「スプレンドイド」は、頻繁に象限の交替が行われた<sup>635</sup>。

アルゼンチン海軍がアルゼンチン本土の沿岸海域に戻ってからの原子力潜水艦の任務は、アルゼンチン本土の空軍の飛行場の近海で「バリエント」による6月8日のアルゼンチン本土のリオ・グランデ(Río Grande)基地からフォークランド諸島に向かうアルゼンチン軍機を発見し報告のように早期警戒の役割を果たしている。

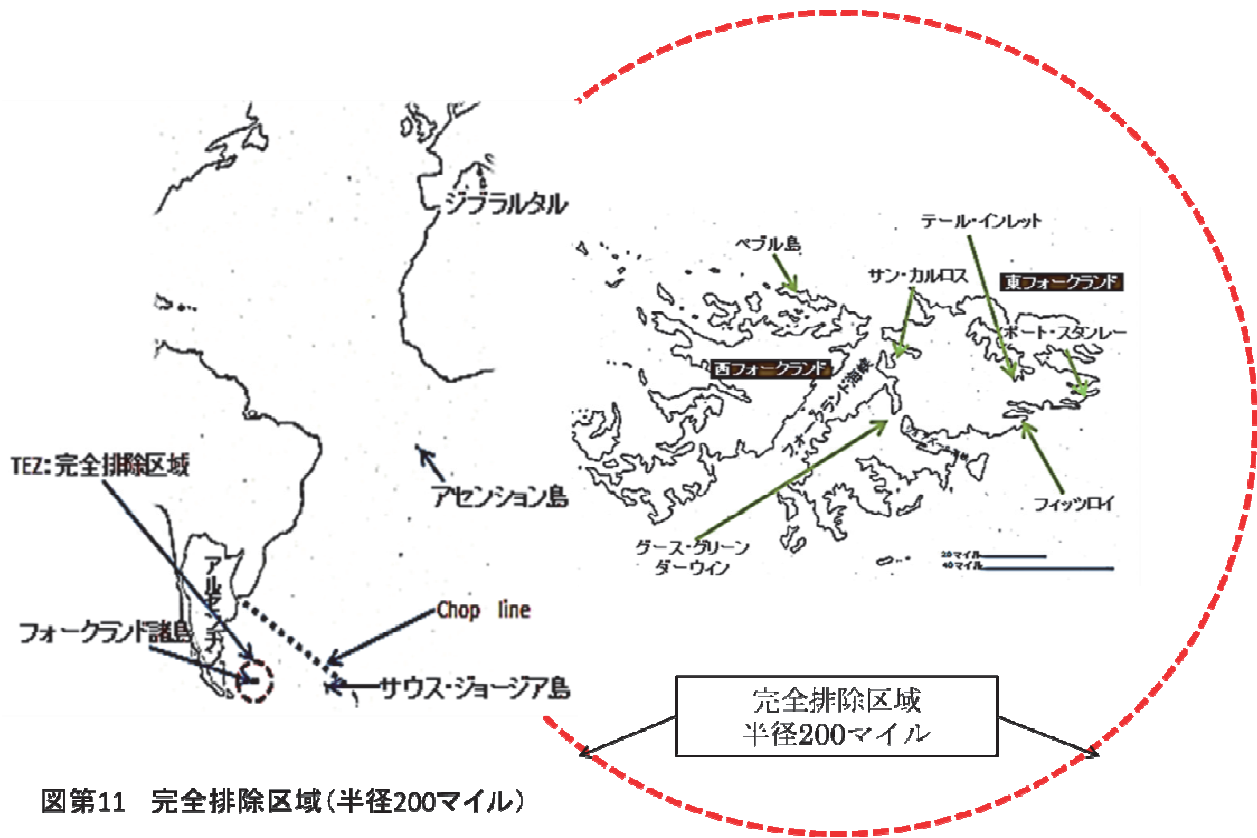
表第1 両軍の排除区域の設定時期と主要事象	
4月2日	●アルゼンチン軍、フォークランド諸島を占領 ○1930 (ロンドン時間)、イギリス政府、閣議で任務部隊の出港に合意
4月3日	●アルゼンチン軍、サウス・ジョージア島を占領 ○国際連合決議 502号採択
4月7日	○イギリス政府、12日0400Z時以降、フォークランド諸島周辺200マイルに海上排除区域(Maritime Exclusion Zone: MEZ)の設定を宣言
4月12日	○イギリス、MEZを設定。イギリス原子力潜水艦「スパルタン」がポート・スタンレー沖着
4月23日	○イギリス政府、イギリスの任務部隊の脅威となるアルゼンチン軍艦艇および航空機は適切なやり方で対処されると警告 ○イギリス政府、任務部隊の25マイル以内に接近するアルゼンチン艦艇、戦闘機および潜水艦に対する攻撃を許可
4月25日	○イギリス軍、アルゼンチン潜水艦「サンタ・フェ」を撃破 ○イギリス軍、サウス・ジョージア島を奪回
4月26日	○イギリスの空母戦闘群周辺に「防護区域」(defence area)の設定を宣言
4月28日	○イギリス政府、4月30日にMEZを完全排除水域(TEZ)とすることを宣言
4月29日	○イギリス空母戦闘群MEZ(TEZ)に入る

<sup>633</sup> Admiral Sandy Woodward with Patrick Robinson, *One Hundred Days*, pp.172f.

<sup>634</sup> *ibid.*, p. 173.

<sup>635</sup> *ibid.*, p. 173.

4月30日	○イギリス、MEZをTEZに変更（世界標準時5月1日の0130Z時（フォークランド時間30日2230）
4月30日	●アルゼンチン政府、イギリス軍に対する攻撃を許可
5月1日	○イギリス軍のバルカン爆撃機およびハリヤーがスタンレー飛行場を攻撃
5月2日	○イギリス政府、潜水艦の交戦規定(ROE)を変更。（アルゼンチン軍艦への攻撃を許可）。イギリス原子力潜水艦「コンカラー」がアルゼンチン海軍巡洋艦「ヘネラル・ベルグラノー」を撃沈
5月4日	●アルゼンチン軍のシュペル・エタンダール機がエクゾセ・ミサイルによりイギリス駆逐艦「シェフィールド」を撃破（後に沈没）
5月7日	○イギリス、TEZをアルゼンチン本土沿岸12マイルにまで拡大と宣言
●アルゼンチン政府、4月中旬までにサウスジョージア島周辺海域200マイルに排除水域も設定を宣言	
●アルゼンチン政府、イギリスの海上排除区域設定に対抗してアルゼンチン本土の沿岸およびフォークランド諸島の沿岸から200マイルに排除水域の設定を宣言	
Ministry of Defence, <i>The Falklands Campaign: The Lessons</i> , Cmnd 8758 (London; HMSO, 1982)などを基に作成	



図第11 完全排除区域(半径200マイル)

### 第3節 イギリス水上部隊による敵兵力漸減(attrition)の試み

イギリス軍がフォークランド諸島の奪回という戦略的目的を達成するには、イギリス海軍部隊は大きく3つ作戦上の目標を達成する必要がある。1つ目は、フォークランド諸島周辺海域の制海権の確立、2つ目は制空権の確立、3つ目はフォークランド諸島に上陸部隊を無事に上陸させ、上陸部隊の作戦を支援することであった<sup>636</sup>。

<sup>636</sup> Scot Macdonald, "The Falklands Campaign: The British Reconquest and the Argentine Defense," *Marine Corps*

## 第1項 制海権の確立

イギリス先遣隊の艦艇は、両用戦部隊が到着する前に、アルゼンチン海軍との戦闘機会を作為する行動を採っている。4月15日から、42型フリゲート艦、「ブリリアント」と21型のフリゲート艦「アロー」、イギリス艦隊補助部隊の支援給油艦「アップルリーフ」、42型駆逐艦「コンベントリー」、「グラスゴー」、「シェフィールド」で編成された部隊はフォークランド諸島の北方で3日間哨戒した。この行動は、アルゼンチン海軍を戦闘に誘い出すための行動であった<sup>637</sup>。

ウッドワードは、その初期の計画を排除水域内で、あえて空母戦闘群の存在の誇示することで、ウッドワードはアルゼンチンにイギリス軍の上陸部隊がフォークランド諸島に迫っていると思込ませ、アルゼンチン海軍に行動を起こさせることにより、アルゼンチン海軍との交戦の機会を作ろうとしている。本物の水陸両用戦の部隊が到着する前にアルゼンチン海軍に損害を与え、同時に、アルゼンチン軍のフォークランド諸島の防衛計画も探ろうとしている<sup>638</sup>。

このような理由から、アルゼンチン海軍が戦闘準備を進めているという情報はウッドワード少将にとって歓迎すべき情報だった。交戦がなければ損耗はないからである<sup>639</sup>。アルゼンチンの偵察機707が空母戦闘群に接近したとき、空母戦闘群はレーダー妨害用金属破片（チャフ）を発射して対応した。偵察機707のレーダー画面に映る空中に散布されたチャフの雲の映像が、水陸両用群が存在する印象を強めるためであった。ウッドワードの、4月30日の戦時日記には次のようにある<sup>640</sup>。

「アルゼンチンに我々は先遣の水陸両用群の部隊であると確信させることができれば、そうなれば、アルゼンチン海軍は我々の前に現れ、我々は我々の条件で戦える」

つまり、ウッドワードはアルゼンチン軍に行動を起こさせ、戦闘を生起し、戦闘でアルゼンチン軍を損耗させることで、本格的な上陸作戦の際の負担を軽減しようとした。一方で、ウッドワードは排除水域に近づくに従い、空母戦闘群の脆弱性の懸念を増大させている。4月24日、ウッドワードはフィールドハウスに電報で空母戦闘群が行っている「兵力の誇示」(show of force)に合った交戦規定(ROE)を求めている。

「私の軍事の助言は明確な目的によるものである。・・・アルゼンチンはフォークランド諸島に侵攻した。そして、他のすべての証拠から、アルゼンチンは全体的に兵員や銃砲装備の数が勝ることがなくても、アルゼンチンの都合のいい場所で戦う意図は明らかである。現行の交戦規定(ROE)は一区域での戦闘は許し

---

*Gazette*, March, 2000, pp.72-80.

<sup>637</sup> Scot Macdonald, "The Falklands Campaign," 2000, p.72.

<sup>638</sup> MajGen Jeremy Moore and Radm John Woodward, "The Falklands Experience," *Journal of the Royal United Services Institute*, March 1983, p.28.

<sup>639</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.278.

<sup>640</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.278.

ているが、別の区域で行は許していない。・・・軍事的に意味がない。とりわけ、先制攻撃(pre-emptive attack)を受け、空母の「ハーミーズ」か「インヴィンシブル」を失うか、重大な深刻な被害を受ければ、それ以降のイギリス軍の作戦の見通しはなくなる。・・・この軍事的な大失敗は正当化される重要な政治的な強みを提供しなければならない。しかし、もし政治的な圧力が必要とするならば、空母戦闘群は集結されるべきあり、激烈な戦闘に十分に備えられるべきである。とりわけ、そのような集結は最大の抑止的な効果を持つべきであるためである。・・・もし、我々が兵力を誇示することを望むならば、我々はそれに相応しいやり方を行うべきである。もし、我々が相応の「兵力の誇示」をするならば、戦闘するうえで可能性のある必要なものを十分に承諾されるべきである。もし、我々が戦闘しなければならないのなら、我々は最良で可能な方法を巧みに実行しなければならない。もし、本気で殺し合いが始まれば、我々は戦闘を終結まで遂行する政治的必要性を認識すべきである、かりに、人命が無駄に失われるべきではないのなら。もし、人命が無駄に失われるべきではないのなら、我々はまず「兵力の誇示」に努めるべきである。・・・」

このようなウッドワードの懸念は、たとえイギリス本土の外交官および法律家が国際的に正当化されないとされる行動は行うべきでないとは主張しても、イギリス本土の各軍の参謀長には交戦規定(ROE)を制約の緩いものに変更させるには十分な圧力であった<sup>641</sup>。

4月30日の夕刻にイギリス任務部隊に配布された情報分析は、「完全排除水域でアルゼンチンの部隊と遭遇する可能性がある。その時、アルゼンチンの部隊の交戦規定(ROE)は緩和されていると思われる」と警告していた<sup>642</sup>。

少し遅れて届いた捕捉情報によれば、アルゼンチン海軍の巡洋艦「ヘネラル・ベルグラノー」を含むアルゼンチン海軍の一群は偵察活動のため北方に向け行動している可能性があったが、5月1日0735Z時の時点で、「ヘネラル・ベルグラノー」が完全排除水域に入る可能性も含め、巡洋艦「ヘネラル・ベルグラノー」とされる活動は報告されていない。

この時点まで、イギリス原子力潜水艦「コンカラー」は「ヘネラル・ベルグラノー」の探知に努めている<sup>643</sup>。4月29日朝、「ヘネラル・ベルグラノー」の一群ではないかと知らせがあった。ソナーで探知されていたのは、アルゼンチンの商船給油艦(oiler)の「Puerto Rosales」であり、4月30日の午後まで探知されていた。

4月30日の夕刻、ウッドワードはノースウッドから「ヘネラル・ベルグラノー」の一群を捕獲、攻撃せよとの指令を受け取った。ただし、完全排除水域内で行うことが求められていた。

翌日の5月1日の朝のウッドワードが受け取った情報要約(intelligence summary)は、5月1日の0630Z時から0930Z時の間に完全排除水域への侵入が予想されていた。5月1日の1400Z時に「コンカラー」は「ヘネラル・ベルグラノー」の一群を認め、追跡を始めており、ロンドン郊外のノースウッドに5月1日

<sup>641</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.275.

<sup>642</sup> *ibid.*, p. 278.

<sup>643</sup> *ibid.*, p. 278.

の 1529Z 時に報告され、イギリス国防省には 1605Z 時に伝えられている。

一方、イギリス原子力潜水艦「スプレンドイド」は空母の一群を探し出すことを命じられていた。4 月 29 日、「スプレンドイド」は何度も 3 隻の A69 型フリゲート艦・コルベット艦（「グランビーリエ」「ドゥルモンド」「ゲリコ」）および 2 隻の 42 型駆逐艦（「サンティシマ・トリニダー」「エルクレス」）を視認したが、航空母艦を捕捉することはなく、航空母艦はアルゼンチン本土の港に帰投したものと推測し、南下するフリゲート艦を沿岸の航空母艦と会合するとみて追尾した。

「スプレンドイド」が状況報告を送信するために、潜望鏡深度まで浮上した際、フリゲート艦が南西方向に加速したため、「スプレンドイド」はフリゲート艦を失探した。「スプレンドイド」はフリゲート艦の後を追ひ、航空母艦が存在すると推測する南方に向かった。

「スプレンドイド」は「エルクレス」を再捕捉、「コモドロ・ピー」も捕捉した。幾つかの探知事象があったため、「スプレンドイド」はその場を離れられなかった。しかし、依然、空母の探知情報は得られず、翌朝、交戦規定(ROE)が変更されアルゼンチン海軍の空母「ベインティシンコ・デ・マヨ」に対する攻撃が許可された知らせも受けていた。「スプレンドイド」は、追尾中の艦艇が「ベインティシンコ・デ・マジョ」と会合すると予測し海域にいた。

しかし、「スプレンドイド」は 5 月 1 日 0800Z 時現在探知できないでいた。探知目標のなかには、艦艇らしきものもあり、潜望鏡深度まで浮上したが、視認することはできなかった。「スプレンドイド」は、0900Z 時までは、この地域における索敵をあきらめ、アルゼンチン潜水艦を求めて北方に向かった<sup>644</sup>。

5 月 1 日の午後、ウッドワードは完全排除水域内で初めて生起したアルゼンチン空軍による反撃について、フィールドハウスに「イギリス原子力潜水艦が「ヘネラル・ベルグラノー」および「ベインティシンコ・デ・マヨ」を攻撃することを希望する。両艦ともより大胆な行動に出るように思われる」という内容で締めくくる電報を次の理由から送っている<sup>645</sup>。

私は、この任務で、バルカン戦略爆撃機の高度な仕事に頼りたい。必要ならば、シー・ハリアーによる護衛を付ける。それでも、アルゼンチンは陸上の基地に相当な航空兵力を保有し、我々は 20 機のシー・ハリアーしか保有していないという事実と直面せざるをえない。我々は制空権を確保するうえで、相当なリスクを取る必要がある。

一方、我々の攻撃能力は、事実、イギリス原子力潜水艦と海軍艦艇による艦砲射撃だけである。昼間に艦砲射撃を実施するのはリスクが高い。しかし、夜間における艦砲射撃は非常に抑制効果がある。一方でイギリス原子力潜水艦によるアルゼンチン軍の高価値部隊(High Value Units:HVUs)に対する攻撃は、相対的にリスクが低い。「ヘネラル・ベルグラノー」および「ベインティシンコ・デ・マヨ」に相当の被害

<sup>644</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.279.

<sup>645</sup> *ibid.*, p. 288.

を与えれば、アルゼンチンを相当くじくことができる。イギリス原子力潜水艦がそのような行動を可能にする交戦規定(ROE)が与えられれば、我々はリスクを最小限にする一方で、可能な限り攻撃的になることで最善を尽くさなければならない。同時に、敵に広範囲の作戦行動を強いることで敵の航空兵力資源を拡張させる」

ウッドワードはフィールドハウスにバルカン戦略爆撃機による爆撃を要望していた。この電文には今回のアルゼンチン軍機による攻撃およびイギリス空母戦闘群シー・ハリアーにおける反撃における見積もりに関して次のように報告している<sup>646</sup>。

「彼らは大規模な航空攻撃により我々を迎える十分な機会を逃した。その日が終わろうとしたときだけであった。アルゼンチン空軍の爆撃機キャンベラの出現によりその考えは覆された。私は、キャンベラによる攻撃は失敗だったが、我々を攻撃する意思の強さを示し、そしてアルゼンチン軍が、我々を攻撃するための陸上基地所属の航空兵力が不十分であると信じる。この状況を維持するには、スタンレーの飛行場の制圧次第であることは間違いない。私は低水準のシー・ハリアーに昼間の攻撃を行わせることは、遅かれ早かれ、我々の防空の兵力を消耗させる」

ウッドワードは4月30日の夜までに排除水域に入り、排除水域の東側に設定した哨戒水域で空母を運用させた。空と海から、可能なすべての火力を、フォークランド諸島の首都ポート・スタンレーおよび他の仮設滑走路に集中的に浴びせ、制圧しようとした。アルゼンチンの潜水艦の存在が見込まれる海域では対潜掃討を行い、アルゼンチンの航空母艦「ベインティシンコ・デ・マジョ (Venticinco de Majo<sup>647</sup>)」はイギリス原子力潜水艦により無力化しようとした。

ウッドワードによると5月1日のアルゼンチン軍の被害は、ミラージュ III3 機および「キャンベラ」(Canberras)を1機または2機撃墜したと評価している<sup>648</sup>。ウッドワードが当初意図していた、アルゼンチン軍兵力の損耗はある程度達成した。

また、アルゼンチンは、5月1日のイギリス軍のバルカン戦略爆撃機によるフォークランド諸島への爆撃を受け、アルゼンチン軍の司令官はバルカン戦略爆撃機によるアルゼンチン本土攻撃の可能性に予期することとなり、この時を境に、アルゼンチン本土の脅威がアルゼンチンの計画における主題の1つとなった<sup>649</sup>。

今回のバルカン戦略爆撃機の役割をアルゼンチン空軍の幹部は読み違えた。それはアルゼンチン空軍の幹部はフォークランド諸島の飛行場に対する大規模な襲撃を予想していたのに反し、イギリス軍の爆撃はバルカン戦略爆撃機1機であったためである。また、同様の理由からアルゼンチン軍の反応は、アルゼン

<sup>646</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.288.

<sup>647</sup> “Venticinco”はスペイン語で「25」、 “mayo”は「5月」の意味。「5月25日」はアルゼンチンの5月革命記念日(1810年5月25日に成立した最初の自治政府を記念した日)。

<sup>648</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.286.

<sup>649</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.286.



チン軍が意図していたものよりも慎重なものとなった。

計画では、スカイホーク(A-4B)による 14 回の出撃、A-4C スカイホークによる 12 回の出撃、キャンベラによる 6 回の出撃、ダガーによる 12 回の出撃、ミラージュ III による 10 回の出撃であった。実際には、アルゼンチン軍機によるイギリス軍に対する攻撃は 35 回であった。

イギリス軍はフォークランド諸島の飛行場などへのイギリス軍の攻撃に対し、アルゼンチン軍は航空攻撃の形による反撃をとるものと見ていた。当時、イギリスはアルゼンチンの攻撃機の航空兵力を次のように見積もっていた<sup>650</sup>。

(保有機種と保有数 ( ) 内は稼働数)

アルゼンチン空軍

・A-4B スカイホーク	33 機	(18 機)
・A-4C スカイホーク	20 機	(14 機)
・ダガー	36 機	(24 機)
・ミラージュ III	14 機	(8 機)
・「キャンベラ」	6 機	(6 機)

アルゼンチン海軍

・A-4Q スカイホーク	12 機
・シュペル・エタンダール	5 機
・ブカラ	12 機※フォークランド諸島に進出した機数を除く。

ウッドワードは、フォークランド諸島内の状況偵察のために陸軍特殊空挺部隊、海軍特殊舟艇部隊を上陸させた。ヘリコプター、小型ボート、そして、通常動力（ディーゼル推進）潜水艦で唯一フォークランド戦争に派出された「オニクス」により、特殊部隊はフォークランド諸島に上陸し、約 3 週間にわたって、本格的な上陸作戦に不可欠な情報を収集した<sup>651</sup>。イギリス空母戦闘群は 4 月 30 日から 5 月 2 日の間、陸軍特殊空挺部隊(SAS)の G 中隊の 8 個偵察班および海軍特殊舟艇部隊(SBS)の 2 名を第 846 海軍飛行中隊のシー・キング HC.4 などで上陸させている。

制海権の確立は、5 月 3 日にイギリス原子力潜水艦「コンカラー」がアルゼンチンの巡洋艦「ヘネラル・ベルグラノー」を魚雷で撃沈することで確立されたとされる。イギリス海軍は、アルゼンチン海軍と水上戦闘を行わないで、制海権を確立したことになる。イギリスのノット国防相はイギリス国防省のフォークランド戦争の報告書のなかでイギリス原子力潜水艦の役割を次のように積極的に評価している。

<sup>650</sup> *ibid.*, p.286.

<sup>651</sup> John Fieldhouse, “Despatch by Admiral Sir John Fieldhouse, G.C.B., G.B.E., Commander of the Task Force Operations in the South Atlantic: April to June 1982,” p.16113.

「我々の原子力潜水艦(SSN)は、極めて重要な役割を果たした。「ヘネラル・ベルグラノー」を撃沈した後、アルゼンチンの水上艦艇は効果的に戦闘に加わることは全くなかった」

## 第2項 航空優勢の未達成

イギリスの空母戦闘群の指揮官ウッドワードが後に認めているようにイギリス海軍はフォークランド諸島周辺の航空優勢の確立に失敗している<sup>652</sup>。イギリス海軍はフォークランド諸島に上陸部隊を無事に上陸させることに成功させ、上陸作戦および上陸部隊への支援作戦において、水陸両用艦船および輸送船はほとんど被害受けなかったが、多くの駆逐艦などに被害を受けた。

アルゼンチン軍が攻撃目標を駆逐艦ではなく水陸両用艦船または輸送船を攻撃目標にしていたら、上陸作戦および地上での戦闘の帰趨は変わっていた可能性がある。ウッドワードはアルゼンチン軍が駆逐艦を攻撃目標にしたことは「敵の最も大きな間違い」であったと述べている<sup>653</sup>。

当初から懸案となっていたアルゼンチンの航空兵力に対抗するためにイギリス海は2隻の航空母艦を守ることを重視した。上陸作戦を成功させるうえでハリアーは不可欠と位置づけられ、母艦である航空母艦は1隻も失えない兵力と考えられた。このためウッドワードは、2隻の空母をフォークランド諸島の東方90マイルから100マイルの海域で行動させた。アルゼンチン本土のアルゼンチン軍機が有効に作戦できない海域でハリアーの発着艦を行っている。しかし、このような航空母艦の運用はハリアーの作戦空域における行動可能時間に制限を及ぼす結果となった<sup>654</sup>。

フォークランド諸島に設けられたアルゼンチン軍の飛行場施設に対する攻撃は、アセンション島からイギリス空軍バルカン戦略爆撃機、海軍特殊舟艇部隊(SBS)および航空母艦艦載機のハリアーが行った。

空母戦闘群は本格的な上陸後における水陸両用群の艦艇などの防空を重層的に行っている。最も外側(第1層)はハリアーが担い、次の第2の層を42型および22型の駆逐艦がフォークランド水道の北端で哨戒しながら、装備するシー・ダート・ミサイルおよびシー・ウルフ・ミサイルより、いわゆる「ミサイルの罠」(missile trap)を担った。さらに内側の第3の層では、「銃砲線」(gun line)と呼ばれ、サン・カルロス湾の入り口に配置された3、4隻の駆逐艦が担った。最後の第4の層は、サン・カルロス湾の水陸両用群の艦艇の小銃とシー・キャット・ミサイル、さらに、陸揚げされたブロー・パイプ・ミサイルおよび砲が担った<sup>655</sup>。

## 第4節 アルゼンチン任務部隊とイギリス空母戦闘群の対決

### 第1項 アルゼンチン巡洋艦「ヘネラル・ベルグラノー」の撃沈

イギリス原子力潜水艦「コンカラー」が魚雷により完全排除水域の外で行ったアルゼンチン海軍巡洋艦

<sup>652</sup> MajGen Jeremy Moore and RAdm John Woodward, "The Falklands Experience," *Journal of the Royal United Services Institute*, March 1983, p.30.

<sup>653</sup> *ibid.*, p.30.

<sup>654</sup> Scot Macdonald, "The Falklands Campaign," p.74.

<sup>655</sup> *ibid.*, p. 75.

「ヘネラル・ベルグラノー」の撃沈は、フォークランド戦争の戦闘が終了後、最も議論の的となった事象である。イギリスの公式戦史は、この申し立てを明確に否定しているが<sup>656</sup>、当時、多くのジャーナリストや政治家がこの事象の問題とした点は、攻撃目的は 44 年前の旧式巡洋艦ではなく、まとまりかけていたペルー和平案を潰すことであったというものであった<sup>657</sup>。

1982 年 12 月 21 日、イギリス労働党のタム・ダルエル(Tam Dalyel)は、下院でサッチャー首相に次のように断言している。

「冷淡にして故意に「ヘネラル・ベルグラノー」を撃沈する命令を出した。名誉ある和平が提案されていることを承知の上で、・・・「コンカラー」の魚雷が和平交渉を粉碎した・・・」

当時のアルゼンチン外相ニカノール・コスタ博士は「ヘネラル・ベルグラノー」を攻撃することを承認することで、イギリス政府はペルーのベラウンデ・テリー大統領(President Belaunde Terry)が提案した和平案を沈めた(scuttled)、アルゼンチンの軍事評議会はその和平案をまさに受け入れるところであったとイギリスを非難していた。また、ニカノール・コスタ＝メンデス外相(Dr Nicanor Costa Mendez)はさらに一步議論を一步進め、「ヘネラル・ベルグラノー」の撃沈は唯一最も大きな拡大行為であり、軍事評議会は、あたかも強迫されているようで、どんな案も受け入れることはできなかったと主張した<sup>658</sup>。ただし、「ヘネラル・ベルグラノー」の艦長、ボンゾ(Captain Bonzo)は、次のように語っている<sup>659</sup>。

「私は決して怒りの感情を抱きはしない。もし、私が「コンカラー」の艦長の部下であったら、今、あなたと私が議論していることと同じように戦術に関して議論をしたことでしょう。私は、最初から 200 マイルの境界は私が遂行すべき任務と何の関係もないことを理解していた。境界は危険もリスクから守るものではない。境界の内か外かは同じことであった。私の意見としては、次のことに関しては極めて厳格でありたい。それは、200 マイルは 5 月 1 日まで有効だった。その間、外交交渉が行われていた。そして、現実の戦闘行為が生起するまで有効だった。現実の戦闘は 5 月 1 日に起こった。」

一方、イギリス側の主張として、例えばイギリス海軍の戦史部長による、『イギリス海軍とフォークランド戦争』は、次のように解説している<sup>660</sup>。

このペルー和平案は、実は、ベラウンデ・テリー・ペルー大統領は直接アルゼンチン軍事評議会に自分の和平案を提示し、その後で、仲介者となったアメリカを通じてイギリスに示されたものである。ペルー大統領

<sup>656</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.743.

<sup>657</sup> *ibid.*, p.743.

<sup>658</sup> David Brown, *The Royal Navy and The Falklands War*, p.135.

<sup>659</sup> Middlebrook, *Argentine Fight for the Falklands*, p.117f. , *The Fight for the 'Malvinas': The Argentine Forces in the Falklands War* (London: Viking, 1989), p.116.

<sup>660</sup> David Brown, *The Royal Navy and The Falklands War*, p.135.

領はアルゼンチンの指導者が回答する前に、イギリス政府がペルー案の条件を知る前に、ペルー案の存在を公表している。

また、同書によれば「ヘネラル・ベルグラノー」およびともに行動していたエクゾセ・ミサイル装備の2隻の駆逐艦の存在は、完全排除水域付近の兵力バランスを大きく変えたとしている<sup>661</sup>。第1の理由は「ヘネラル・ベルグラノー」の装備する6インチ砲はイギリス艦艇の5インチ砲より射程が長いことであり、第2の理由は、両軍における唯一の装甲艦である「ヘネラル・ベルグラノー」の外板は55ポンド砲弾ではほとんど効果が見込めず、対艦ミサイル・エクゾセでも効果が見込めなかったことを挙げている。

空母戦闘群の兵装で「ヘネラル・ベルグラノー」に対処可能な兵器は潜水艦が搭載している21インチ魚雷とシー・ハリアーの1,000ポンド爆弾だけであった。航空機は最も重要な防空任務用として決して十分な保有機数ではなかった。そして、イギリス空母戦闘群の行動の転換は多分、高くつくことを示すことになる。

「ヘネラル・ベルグラノー」が完全排除水域に入るべく北東に針路を変え増速した場合、直ちに戦術的に困難な状況に空母戦闘群は直面することになったと指摘している<sup>662</sup>。また、「ヘネラル・ベルグラノー」は2発の魚雷を受けても十分生き残ると考えられていた<sup>663</sup>。特に、無傷の2隻の駆逐艦を伴い、海面は特に荒れておらず、デ・ロス・エスタドス島（スタテン島）の風下、100マイル以内で、アルゼンチン本土の海軍基地、ウスアイア(Ushuaia)から約240マイルしかない位置にいたためである<sup>664</sup>。

## 第2項 経緯

5月2日、「コンカラー」は、「ヘネラル・ベルグラノー」は完全排除水域に入るものと予測していたが、5月2日の01071Z時まで、「ヘネラル・ベルグラノー」はその針路を変え、しばらくの間、針路が定まらない様子であったが、「ヘネラル・ベルグラノー」は完全排除水域に入ることなく外縁を沿うように完全排除水域の南約18マイルを東方に向んでいた。

5月2日0645に、「コンカラー」が受信した電報（情報）は、アルゼンチン軍は完全排除水域で、イギリス海軍の艦艇を攻撃することを示唆していた。

5月2日0900Z時、アルゼンチン軍は完全排除水域を避けているように見え、5月2日1144Z時、「コンカラー」艦長のレッドフォード・ブラウン大佐(Commanding Officer, Commander C Wreford-Brown)は、情報に反し「ヘネラル・ベルグラノー」は、現在、西方に進んでいるという結論に至っている。「コンカラー」艦長は、「ヘネラル・ベルグラノー」が完全排除水域の危険さに気づいたと考えた結果である。

5月2日1400Z時、電報の送受信のために「コンカラー」は潜望鏡深度についた。「コンカラー」艦長が命令文を理解するのにしばらくかかった。当時、「コンカラー」は、通信装置に重大な問題を抱えていた。

<sup>661</sup> *ibid.*,p.134.

<sup>662</sup> David Brown, *The Royal Navy and The Falklands War*,p.134.

<sup>663</sup> *ibid.*,p.135.

<sup>664</sup> *ibid.*,p.136.

無線用支柱(wireless mast)を損傷していたためである。「コンカラー」艦長はウッドワードによる攻撃命令が取り消されたことを承知していた。

任務部隊司令部のノースウッドの電報処理は、電報を受信すべきすべての潜水艦から返信があった時に、送信を終了させるというものである。ブラウン艦長は、「コンカラー」への命令を把握するまで潜望鏡深度にとどまった。5月2日1710Z時までに、ブラウン艦長は命令を理解し、攻撃する意思を示す電報を送信した。

「ヘネラル・ベルグラノー」は完全排除水域(Total Exclusion Zone: TEZ)の南約35マイル、バードウッド堆(Burdwood Bank)の150フィート(45メートル)の部分の1つから40マイル10ノットで、ティエラ・デル・フェゴ(Tierra del Fuego)の東の沖にあるデ・ロス・エスタドス(Isla de los Estados)の方に航行中であった。

「コンカラー」艦長は「ヘネラル・ベルグラノー」への攻撃を慎重に計画し実施した。

1813Z時、「コンカラー」は魚雷発射占位し、戦闘配置についた。「コンカラー」は2隻の直護駆逐艦との距離を可能な限り最も広くとりながら、蛇行運動をする「ヘネラル・ベルグラノー」に近接し1857Z時までに、理想的な位置である「ヘネラル・ベルグラノー」の左艦首1,400ヤードに占位し、「コンカラー」艦長はMk8魚雷を3発一斉に発射した。斉射の数量と方向は、1発は命中することが推定されるものであった<sup>665</sup>。

「ヘネラル・ベルグラノー」の見張りは「コンカラー」の魚雷に気づくことなく、「コンカラー」が発射した3発のうちの2発の魚雷が「ヘネラル・ベルグラノー」に命中したのを観測している。残りの1発の魚雷は直護艦の「ブーチャード」に命中したが、爆発はしなかった。「コンカラー」は攻撃後、「ヘネラル・ベルグラノー」の僚艦の攻撃を逃れるために、高速で南東方向に離脱した。このため「コンカラー」は「ヘネラル・ベルグラノー」の最後を見ることも、聞くこともできなかった<sup>666</sup>。そのうえで、新しい交戦規定(ROE)に応じ、バードウッドバンク(Burdwood Bank)とロス・エスタードス島(Isla de los Estados)の間の範囲を再度、アルゼンチンの駆逐艦捜索のために旋回した。

「コンカラー」は1930Z時までに、「ヘネラル・ベルグラノー」を魚雷攻撃の第1報の送信を終えている。第1報で、「ヘネラル・ベルグラノー」攻撃時の「ヘネラル・ベルグラノー」の位置、針路、速力、そしてMk82発が命中し「ヘネラル・ベルグラノー」への攻撃の成功し、東方に回避した」ことが報告された。

イギリス公式戦史は、「コンカラー」の東方への回避行動は必要であったとしている。2、3分以内に、「コンカラー」は、繰り返し対潜魚雷攻撃を受けていたためである。「コンカラー」の乗員は2052Zから2103Z時の約10分間以上、対潜魚雷の爆発音を聞いている<sup>667</sup>。

ブラウン艦長は、旧式の魚雷の方のMk8魚雷を選択したが、ブラウン艦長が旧式のMk8魚雷を選んだ

<sup>665</sup> David Brown, *The Royal Navy and The Falklands War*, p.135f.

<sup>666</sup> *ibid.*, p.137.

<sup>667</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.297

理由は、衝撃力のある Mk8 魚雷の方が、対魚雷用の外板を備えた巡洋艦の外板を貫通する可能性があると考えたためであった。

Mk8 魚雷の他に「コンカラー」が搭載していた魚雷は MK8 魚雷よりも新しく現代的なタイガーフィッシュ(Tigerfish)である。この魚雷も使用可能であり、衝撃力もあり、近接信管を装備していた。「コンカラー」艦長の次の説明から、もし、遠距離からの攻撃であったら、ブラウン艦長はタイガーフィッシュ魚雷を選択したかもしれない<sup>668</sup>。

「私は、攻撃位置とした「ヘネラル・ベルグラノー」の右舷側に占位するのに 2 時間 以上を要した。まだ、昼間だった。視界は変わりやすく、2,000 ヤードまで視界が低下したこともあった。私は視認できるまで近接をした。しかし、潜望鏡深度まで浮上したとき、見失いかけたため、潜航し探知に努めた。私はこのような行動を 5、6 回繰り返した。「ヘネラル・ベルグラノー」の一群はソナーを発信せず、15 ノットぐらいの速度で、ゆるやかに蛇行運動をしながら進んでいた。私は、2 度、魚雷を発射するのに妥当な位置に占位した。「ヘネラル・ベルグラノー」の一群が、2、3 度動いたのを認めた。」

「ヘネラル・ベルグラノー」に乗艦していた乗員約 200 名が最初の爆発で戦死している。火災による影響を抑制する隔壁ドアやハッチが適切に閉鎖されなかったことによる。残り 850 名の乗員は、「ヘネラル・ベルグラノー」が沈没し始めた時、救命いかだに乗り移っている。

過酷な気象海洋条件が被害を受けた「ヘネラル・ベルグラノー」を襲い、「ヘネラル・ベルグラノー」を離艦した乗員が助かる機会を奪っている。最初に生存者を救助するのに丸 1 日要し、最終的に、「ヘネラル・ベルグラノー」の乗員、321 名が戦死した<sup>669</sup>。

2200Z 時、「コンカラー」が「ヘネラル・ベルグラノー」を撃沈したことを知らなかった、空母戦闘群の「グラモーガン」「アラクリティ」「アロー」から成る艦砲射撃支援(Naval Gunfire Support)の艦艇は、砲撃のためにスタンレーに移動していた。2300Z 時、ウッドワードは「ヘネラル・ベルグラノー」の知らせを聞くと直ちに、艦砲射撃支援艦艇に中止して再合同するように命じている<sup>670</sup>。

艦砲射撃支援艦艇は危険であると考えたためであり、北西方向で、アルゼンチン海軍が新たに増強している兆候があったためである。この情報は誤りだった。深夜、シー・キング・ヘリコプターによる 2 回目のフォークランド諸島への陸上偵察隊の投入が行われた<sup>671</sup>。

5 月 3 日 0700Z 時、危険は去ったと認識したブラウン艦長は、「ヘネラル・ベルグラノー」攻撃に関しより詳細な報告を発信した。3 日午後、「コンカラー」は、アルゼンチン艦艇に対し、攻撃的な行動を継続する命令を受けた。当時、「ヘネラル・ベルグラノー」の状況に関し正確な状況を知らず、アルゼンチン艦

<sup>668</sup> *ibid.*,p.297.

<sup>669</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*,p.298.

<sup>670</sup> *ibid.*,p.298.

<sup>671</sup> *ibid.*,p. 298.

艇の位置を確認することに失敗している。

5月4日0145Z時の「コンカラー」はアルゼンチン艦艇を見つけるために、「ヘネラル・ベルグラノー」を攻撃した海域に戻ろうとしていることを電報で報告した<sup>672</sup>。0934Z時、ノースウッドの任務部隊司令部潜水艦群指揮官ハーバート中将は、「ヘネラル・ベルグラノー」の生存者を救助しているアルゼンチン艦艇を攻撃しないという従来の命令を繰り返した<sup>673</sup>。その直後、「コンカラー」は、「ヘネラル・ベルグラノー」の反対側にいた「イーポリート・ブーチャード」を危うく攻撃するところであったことを報告している。

0740Z時、「コンカラー」はアルゼンチン海軍極地輸送艦「バイア・パライソ」を探知している。「バイア・パライソ」は病院船として活動していた。「コンカラー」は「バイア・パライソ」を追尾し、最終的に、1隻の駆逐艦とボーイング707機に接触した。1528Z時、アルゼンチンの曳船(Gurruchaga)および1隻駆逐艦と思われる目標を探知した。「コンカラー」は、それらは、すべて救助作業に従事していると判断して攻撃せず<sup>674</sup>、は完全排除水域へと北上した。

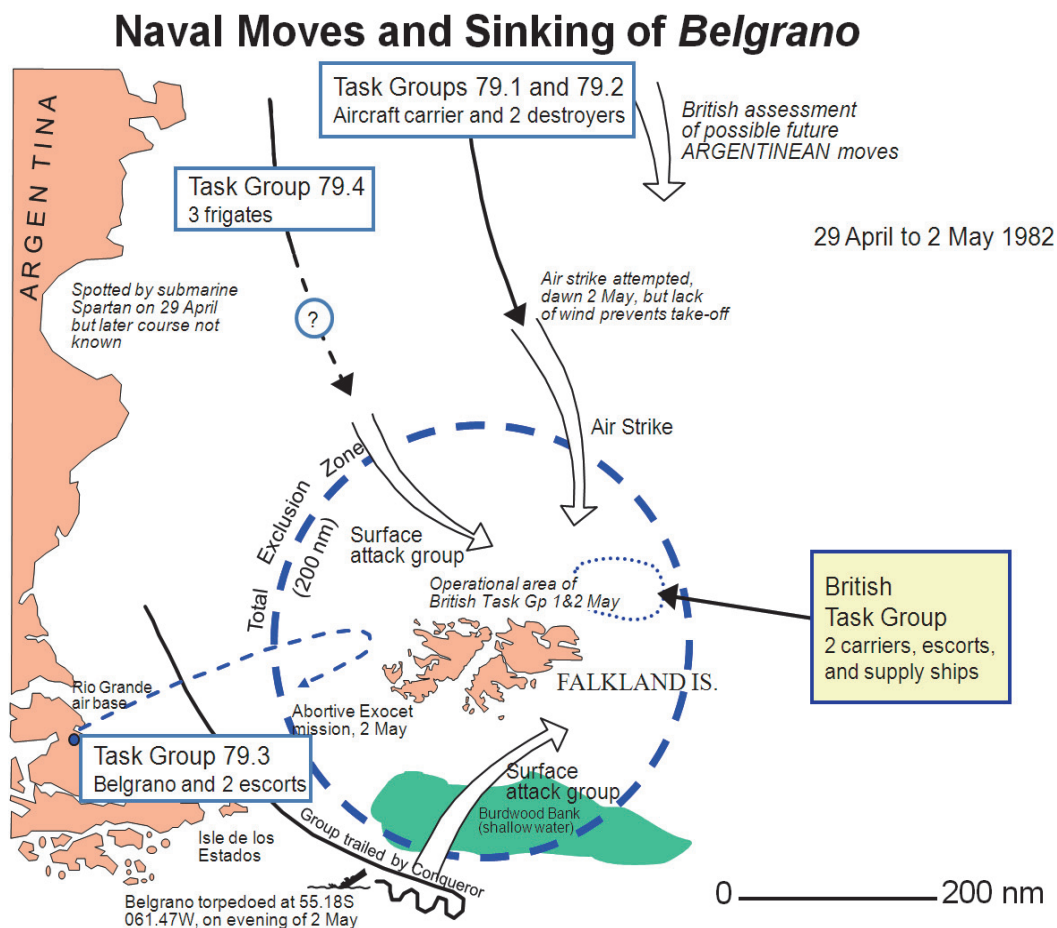


Figure 13. Naval Moves and Sinking of Belgrano.

図第 12 「ヘネラル・ベルグラノー」撃沈時の状況  
Douglas N. Hime, *The 1982 Falklands-Malvinas Case Study*, The United States  
Naval War College Joint Military Operations Department, June 2010, p.23.から。

<sup>672</sup> *ibid.*, p. 298.

<sup>673</sup> *ibid.*, p. 298.

<sup>674</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.298.

### 第3項 アルゼンチン海軍の作戦行動の変遷

5月2日の早い時期までのイギリス側はアルゼンチン側の目的を正しく理解していた<sup>675</sup>。アルゼンチン側は、イギリス側が理解していたように、アルゼンチン海軍は攻勢をとるべく進出し、「ペインティシンコ・デ・マヨ」に乗艦の第79任務部隊指揮官アララ准将は、イギリス艦艇にスカイホークによる攻撃および「ヘネラル・ベルグラノー」からなる艦艇を挟撃部隊として用いることを企図していた。

しかし、次の2つの要因の変化がアルゼンチン側の計画を変化させた<sup>676</sup>。まず、5月2日0100Z時に風が少し弱くなったことであった。戦闘機のスカイホークを空母から離陸させには、相対風速（飛行甲板上の風速）で40ノットが必要であった。その天候では、5月2日0900Z時前にスカイホークを発艦させることはできるとは思われなかった。風は弱まる一方であった。発艦可能時刻はさらにのびるとみられ、燃料および搭載兵器を減らして発艦させる可能性があった。その間もアルゼンチン艦艇はイギリス艦艇との距離を縮めていた。

2つ目の要因は、5月2日0330Z時にあったシー・ハリアーの飛来であった。シー・ハリアーは明らかに、アルゼンチン海軍の航空母艦の集団の位置を突き止めた。以上のことを考慮に入れた結果、アララ准将は計画を継続することは無駄だと決断した。特に、当時の天候の予察から風速がスカイホークを発艦させ得るまで改善することは見込めないとアララ准将は考えた。

このアララ准将の決断は0445Z時にはアルゼンチン南部海軍基地プエルト・ベルグラノーで指揮を執るロンバルドに伝えられた。アララの任務群は「以前の位置に戻る」命令を受けた。ロンバルドはイギリス軍の潜水艦の餌食となる危険を減らすために浅海域(*shallower waters*)に、アルゼンチンの艦艇を復帰させたかった。

「ヘネラル・ベルグラノー」の艦長がロンバルドの命令を受領した時間は不明だが、「ヘネラル・ベルグラノー」は0900Z時には反転を完了していたが、0811Z時まで実際に反転を始めていなかった。その時まで、「ヘネラル・ベルグラノー」はスタテン島(*Staten Island*)の方向に針路を向けていた<sup>677</sup>。

5月2日の他のアルゼンチン軍のすべての攻勢作戦は失敗している。天候不良からアルゼンチン空軍がその日計画していたアルゼンチン本土からの19回の出撃はすべて取り止められている<sup>678</sup>。

イギリスは、直接的に関係ある通信の幾つかは傍受していた。しかし、その活用は進展する事象に影響を及ぼす時期に間に合わなかった。傍受した通信には、アララの航空機の初動に関するものがあった。アララの判断は、自己の部隊が発見されたという仮定の下に立ち去るという決心であった。そして、後のロンバルドからの警告は、イギリス軍による攻撃を予期できるものであった。しかし、これらの傍受した情報は翌日の5月3日まで、イギリスの部隊には配布されず、その日の事象に影響を及ぼすことはなかった

<sup>675</sup> *ibid.*, p. 293.

<sup>676</sup> *ibid.*, p. 293.

<sup>677</sup> *ibid.*, p. 295.

<sup>678</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.295.



イギリスの公式戦史は、アルゼンチンの公式物および「コンカラー」の報告によれば、はっきりと「ヘネラル・ベルグラノー」は5月2日0811Z時まで西への変針を始めていない」と記述している<sup>680</sup>。

ウッドワードは5月2日の午前中、アルゼンチン軍の計画の変更を少しも知らなかった。シー・ハリアー1機が北および北西のアルゼンチン軍の活動状況を探る偵察を継続していたが、明確な兆候は1つも認められていない。空母戦闘群は対空の即応性(readiness)を高い状態のまま維持していた。5月2日の現場海域の日出は1040Z時(0740L時)であった。夜も明けた1100Z時までにウッドワードはアルゼンチン軍による攻撃の可能性は低下していると判断した。その後、午後まで、フォークランド諸島への偵察部隊の投入準備が行われた<sup>681</sup>。

ウッドワードの日記(war diary)の5月2日1600Z時には次のような箇所がある<sup>682</sup>。

「・・・今、アルゼンチン軍は任務部隊を攻撃する決心を、0800頃、取り消し、引き返していると思う・・・」

このウッドワードの判断は、予期していたアルゼンチン軍による航空攻撃がなく、シー・ハリアーによる索敵でアルゼンチン任務群を発見できなかったことに主に基づいていた。

イギリス空母戦闘群は完全排除水域に再度向かった。しかし、ウッドワード少将に決して確信があったわけでない。ウッドワード自身は完全排除水域の東側に位置していた。アルゼンチン軍の航空攻撃の危険に備えてである。イギリス原子力潜水艦の受け持ち区域は、空母戦闘群とアルゼンチン任務群の間となり、2倍になっていた。暗くなった時だけ、ウッドワードはフォークランド諸島に特殊部隊を潜入させるために西に移動した。そして、フォークランド諸島のアルゼンチン軍に向けて艦砲射撃を実施した<sup>683</sup>。

空母戦闘群がフォークランド諸島に移動したとき、イギリスの艦艇を攻撃するために2機のエクゾセ・ミサイルを装備のシュペル・エタンダールがアルゼンチン本土の南のティエラ・デル・フエゴ島のアルゼンチン空軍基地リオ・グランデ基地を離陸している。このアルゼンチン軍機の出撃は燃料補給上の不具合から、イギリス艦艇を攻撃することなくリオ・グランデ基地に帰投した<sup>684</sup>。

北の海域では、アルゼンチン海軍の空母「ベインティシンコ・デ・マヨ」は、依然として、空母戦闘群への近接を図っているとの仮定の下、2隻のイギリス原子力潜水艦が搜索していた<sup>685</sup>。「ベインティシンコ・デ・マヨ」は「スプレンドイド」に割り当てられた哨戒水域を航行していたが、「スパルタン」の方が実際のところ「スプレンドイド」より「ベインティシンコ・デ・マヨ」に近づいていた。5月2日の夕刻、「スプレンドイド」がわずかな探知を得たが、決定的な識別には至らず、翌日の5月3日早朝には失探し

<sup>679</sup> *ibid.*, p. 295.

<sup>680</sup> *ibid.*, p. 295.

<sup>681</sup> *ibid.*, p. 295.

<sup>682</sup> *ibid.*, p. 295.

<sup>683</sup> *ibid.*, p. 296.

<sup>684</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.296.

<sup>685</sup> *ibid.*, p. 296.

ている<sup>686</sup>。

ウッドワードは「ヘネラル・ベルグラノー」の一群は、まだ、追尾されていることを知っていた。しかし、ウッドワードは「ヘネラル・ベルグラノー」が0900Z時に針路を反転させたことを知らなかった。この「ヘネラル・ベルグラノー」の針路の反転は、「コンカラー」により、1400Z時に「ヘネラル・ベルグラノー」の位置と共に、ノースウッドに報告された。それはちょうど、イギリス原子力潜水艦が交戦規定(ROE)の変更を知らされていたときであった。

ノースウッドのハーバート中將は1441Z時、「コンカラー」からの「ヘネラル・ベルグラノー」の変針に関する報告を受領した。しかし、その内容はイギリス国防省にも、ウッドワードにも伝えられなかった<sup>687</sup>。イギリスの公式戦史はこのあたりの状況を、情報には驚くべきものはなかった。アルゼンチン軍の攻撃は差し迫っていないということが、アルゼンチンの攻撃が無期限に延期されたという結論にならなかったためと説明している<sup>688</sup>。アルゼンチン艦艇を追い出そうというウッドワードの原計画は、「ヘネラル・ベルグラノー」の位置を把握していることで十分成功していた。仮に「ヘネラル・ベルグラノー」がその日攻撃されなければ、アルゼンチン海軍が次回、戦闘のための位置についた際、「ヘネラル・ベルグラノー」は戦闘のために戻ったであろう。その時、「コンカラー」は「ヘネラル・ベルグラノー」を見失っていた可能性がある。

ウッドワードは、自己の要求が認められていたことは知らなかった。新しい交戦規定(ROE)はすでに承認され、イギリス原子力潜水艦に伝達されていた。イギリス国防省は1820まで水上艦艇に新しい交戦規定(ROE)を信号で知らせなかった。このため、ウッドワードは再度、「コンカラー」による「ヘネラル・ベルグラノー」への攻撃を可能にする交戦規定(ROE)を要求していた<sup>689</sup>。

ノースウッドのハーバート中將は「ヘネラル・ベルグラノー」の位置の変更を知っていた。現在のアルゼンチンの計画に関するウッドワードの全体的な分析と一致するものであった。ウッドワードと同様、ハーバート中將も任務部隊は可能な時に実行すべきと考えていた<sup>690</sup>。機会は逃すべきではないと考えたためである。仮にハーバート中將がその時点で、ありえないことだが、新しい交戦規定(ROE)を無効にする政治的な権威を持ち、「コンカラー」にそのことを伝達できたとしても、ハーバートがこのことを行ったか分からない。任務部隊が明らかに戦闘準備を整えた敵と交戦できるようにするためには、交戦規定(ROE)の変更は幾つかの点で行われる必要があると判断されていた<sup>691</sup>。

5月4日までに、アルゼンチンの艦隊は、アルゼンチン本土の近くに戻った。アルゼンチン本土の空軍基地からの戦闘攻撃機の援護を受けられる可能性のある海域で行動するようになった<sup>692</sup>。

アルゼンチン軍の南大西洋司令官 (Commander South Atlantic) (アルゼンチン海軍作戦部長) フアン・

---

<sup>686</sup> *ibid.*, p. 296.

<sup>687</sup> *ibid.*, p. 296.

<sup>688</sup> *ibid.*, p. 296.

<sup>689</sup> *ibid.*, p. 296.

<sup>690</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p. 296.

<sup>691</sup> *ibid.*, p. 296.

<sup>692</sup> *ibid.*, p. 301.

ロンバルド中将は、79 任務部隊指揮官アララ准将に新しい交戦規定(ROE)を付与した<sup>693</sup>。それは、自由にイギリス艦隊に攻撃することを考慮したものであった。アララ准将はイギリスの任務部隊に近接し、5月1日 2307Z 時(2007L 時)、攻撃的な作戦の開始を命じていた。

#### 第4項 イギリス軍の交戦規定(ROE)の変更

完全排除水域の南端を航行するアルゼンチン海軍の「ヘネラル・ベルグラノー」はイギリス海軍の指揮官の懸案事項となっていた<sup>694</sup>。

「コンカラー」に追尾されている「ヘネラル・ベルグラノー」および2隻の直衛艦のイギリスの空母戦闘群との距離は、5月2日の夜明けから約300マイルの距離になっていた。「ヘネラル・ベルグラノー」と2隻の直衛艦は5月2日の間中、ゆっくりと西に向かって航行していたが、もし、「ヘネラル・ベルグラノー」の一群が、夕方に、北東に変針したら、「ヘネラル・ベルグラノー」の一群は20ノットの速力で15時間、「ヘネラル・ベルグラノー」の一群の動きを覆う闇を利用することができる<sup>695</sup>。

このような状況は、空母戦闘群に脅威を及ぼすだけではなく、「ヘネラル・ベルグラノー」の一群が、そこから850マイル東方のサウスジョージア島を急襲できる位置にまで達することになる。このような「ヘネラル・ベルグラノー」とその直衛艦の動きは、空母戦闘群が「バインティシンコ・デ・マヨ」を捜索しなければならない限り、空母戦闘群が対抗できる動きでなかった<sup>696</sup>。

このようなアルゼンチン海軍の挟撃行動(pincer movement)の動きの兆候と、その挟撃行動が生起させる空母戦闘群の困難さが、ウッドワードに交戦規定(ROE)を拡大変更する欲求を強めさせた<sup>697</sup>。空母戦闘群にとってアルゼンチン海軍は幅広く別々の方向からの攻撃を企図しており、現在のアルゼンチン艦艇の針路と速力は見間違いである明白な証拠があった<sup>698</sup>。

5月1日0700Z時に任務部隊は再度集結した。この時、ウッドワードは危険が低下するのを感じ始めた。まだ、ウッドワードには不満の種があった。北方においては、アルゼンチンの空母を攻撃する許可を与えていたが、アルゼンチン空母を探知できていない。一方、南では探知事象があるものの攻撃を許可していない。

このようななか、ウッドワードは特にイギリス原子力潜水艦が適切な交戦規定(ROE)を与えられていない状況に満足できなかった<sup>699</sup>。問題は、ウッドワードが、単に目前のアルゼンチンの攻撃に対処できるかどうかということではなく、これらウッドワードが執るイギリス軍の軍事作戦に課されることになる抑制についてであった。

5月1日0811Z時、ウッドワードは以上のような落胆から「コンカラー」に「ヘネラル・ベルグラノー」

<sup>693</sup> *ibid.*, p. 289.

<sup>694</sup> David Brown, *The Royal Navy and The Falklands War*, p.134.

<sup>695</sup> *ibid.*, p. 134.

<sup>696</sup> *ibid.*, p. 134.

<sup>697</sup> David Brown, *The Royal Navy and The Falklands War*, p.134.

<sup>698</sup> *ibid.*, p. 134.

<sup>699</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.292.

の攻撃を命じた<sup>700</sup>。ウッドワードがこの命令をしたとき、ウッドワードは「コンカラー」に対する指揮権はなかった。このため、0904Z時、ノースウッドのハーバート中將は直ちにウッドワードの命令を取り消した。

この出来事は、0915Z時の各軍の参謀長の会議で取り上げられた。ルウィン参謀長委員会議長はウッドワードはすでにアルゼンチンの航空母艦に対して認められていた完全排除水域の外での攻撃許可をすべてのアルゼンチン艦艇、潜水艦、補助艦艇に拡大する交戦規定(ROE)をイギリス艦艇および潜水艦に与えることを、可能な限り速やかに戦時内閣の合意を得ようと説明した。ルウィン参謀長委員会議長はロンドン北西部のイギリス首相の地方官邸であるチェカーズ(Chequers)での昼食で閣僚と会う予定であった<sup>701</sup>。

ルウィンは地方首相官邸チェカーズに到着次第、サッチャー首相に状況を説明している。サッチャー首相は午後の正式の会議の前に、昼食に呼んでいた閣僚を集め、ルウィンが持ち込んだ件を議論した。15分から20分間議論された。参加者の一名、ウィリアム・ホワイトロー(William Whitelaw)は後に、次のように語っている。「コンカラー」が攻撃の許可を受けていない状況で「ヘネラル・ベルグラノー」を失探した際の危険を一旦理解すれば「私が個人的に関与した、最も単純な決定の1つ<sup>702</sup>」であったと語っている。

パーキンソン(Perkinson)は「ヘネラル・ベルグラノー」を沈めることができるとき、そして「ヘネラル・ベルグラノー」が多数の犠牲を伴うイギリス空母を撃沈しようとしたとき、政治が軍事的な要求を拒否した場合、政治家が言うであろう問題の切迫さを特に認めている。

サッチャー首相は参加者全員の意見を聞いてからサッチャー首相自身の意見を述べたが、特に論争にはなっていない。唯一の正式の報告のなかで、その決定をアルゼンチン軍艦艇の動静と意図に関する最新のインテリジェンスと5月1日の軍事的な出来事により生じた新しい状況に関する最新のインテリジェンスを熟考したもの、と記述している<sup>703</sup>。

各軍参謀長は新しい交戦規定(ROE)に補助艦艇も含めることを要求したが、当面の変更は艦艇だけへの変更となった。この即席の会議に参加した法務担当ハーバース(Havers)は、仮に攻撃が完全排除水域から相当離れたところで行われ場合、攻撃を正当化することはより難しくなることを強調している。

フィールドハウスはイギリス艦艇の哨戒水域では非常に生起しにくいと言い、アクランド(Acland)はイギリス外務連邦省に帰り、この決定の重要性について各閣僚は現在の軍事状況における事実を考慮に入れた結果、そのようなことが完全排除水域のはるか遠くで交戦する必要になることは起こりそうもないと報告している。

ワシントンにいた外相ピム(Pym)は、交戦規定(ROE)の拡張は適切に緩められたとの報告を受けている。イギリス外務連邦省と外相ピムに対する説明において、「ヘネラル・ベルグラノー」は「コンカラー」の視

<sup>700</sup> *ibid.*,p. 292.

<sup>701</sup> *ibid.*,p. 292.

<sup>702</sup> *ibid.*,p. 292.

<sup>703</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*,p.292.

界にあるという理由より、アルゼンチンの意図に関する評価に対する一般的な対応として報告された証拠がある。

状況は変わり、軍事的段階が外交を引き継ぎ軍事的な攻勢に傾いていた<sup>704</sup>。各閣僚の合意に至るとすぐ、5月1日1145Z時、イギリス国防省に連絡され、イギリス国防省はフィールドハウスに、1207Z時、その変更が伝達された<sup>705</sup>。30分後、新しい交戦規定(ROE)がハーバート中将により潜水艦群の各潜水艦に伝達された。「コンカラー」の通信上の問題は、変更された交戦規定(ROE)がすべて伝わったか極めて不明確という結果を生んだ。「コンカラー」はすべての伝達文を1710Z時まで受信できなかった<sup>706</sup>。

このような状況でもイギリス外務連邦省は通信伝達の速さに感心していた。後に、ある高官が過去イギリス海軍が主張した海上排除区域を実行する際の通信処理時間を比較したところ、同様の通信処理は（一時の停戦命令の場合のように）12時間後でも保証されなかった。注釈のなかで、ある高官は通信処理に速度は命令の攻撃性に比例して異なるように思われたと記述していた<sup>707</sup>。

#### 第5節 イギリス駆逐艦「シェフィールド」の沈没

駆逐艦「シェフィールド」の被害（沈没）は、水上艦艇に対する新しい脅威、すなわち目視外の距離から発射される対艦ミサイルの脅威が顕在化した事例であった。フォークランド戦争でイギリス海軍は、輸送艦であるが「アトランティック・コンペアー」も対艦ミサイル（フランス製のエクゾセ対艦ミサイル）により失っている<sup>708</sup>。当時、イギリスの空母戦闘群は制空権を確保できないまま、空中早期警戒機も保有していなかった。

5月3日は、天候が不良のため、ほとんどの固定翼機の飛行は行うことができなかった。イギリス空母戦闘群は対潜戦行動を相当実施した。しかし、ドイツ製(type209)潜水艦サルタ級(salta)の2隻の潜水艦は、実際にはフォークランド諸島近海には存在していなかった<sup>709</sup>。

それまで、イギリスはアルゼンチン軍が「ヘネラル・ベルグラノー」と「アルフェレ・ソブラル」の復讐として、イギリス任務部隊に航空攻撃するためにイギリス任務部隊を捜索しているのではないかと見越していた。このような懸念が、バルカン戦略爆撃機によるスタンレー飛行場の爆撃であった。アルゼンチンはスタンレー飛行場からシュペル・エタンダールによる攻撃を行うのではないかとという予測からである<sup>710</sup>。

イギリス軍は、シュペル・エタンダールの攻撃能力を次のように分析していた。空中給油を実施しない場合の作戦可能半径は360マイルと短い。もし、アルゼンチン本土から出撃した場合はフォークランド諸島を横切る。しかし、飛行中にシュペル・エタンダールが給油を実施した場合、エクゾセ・ミサイルを攻

<sup>704</sup> *ibid.*, p. 293.

<sup>705</sup> *ibid.*, p. 293.

<sup>706</sup> *ibid.*, p. 293.

<sup>707</sup> *ibid.*, p. 293.

<sup>708</sup> カーター・A・マイケイジアン（塚本勝也訳）「水陸両用作戦の歴史的变化」立川京一、石津朋之、道下成成、塚本勝也編著『シリーズ軍事力の本質②シー・パワー』芙蓉書房出版、2008年、142項。

<sup>709</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.301.

<sup>710</sup> *ibid.*, p. 302.

撃するための作戦可能半径は、さらに 40 マイル延びる。航空機が空中給油装置を装備しているなら、このような作戦可能半径の延伸の可能性を除外できない。ただし、イギリス軍はアルゼンチン軍の全体の空中給油能力を把握していなかった<sup>711</sup>。

5 月 2 日までに、5 機のシュペル・エタンダール機がリオ・グランデ基地から行動していること、そして、その 5 機は最新の慣性航法装置を装備していないために空母から作戦行動ができないということ、が報告されている<sup>712</sup>。

イギリス軍はアルゼンチン軍の準備がどの程度進んでいるのか知らなかった。シュペル・エタンダールシュペル・エタンダールにはエクゾセ・ミサイル 1 機が装備されているがフランスの技術支援がなくなったため、試験は完全ではない。全シュペル・エタンダール機はエクゾセ・ミサイルと同程度のミサイルを搭載しているが、AM - 39 エクゾセ・ミサイルを完全に装備しているのは 1 機だけであると合同情報委員会 (JIC) は見ていたが、合同情報委員会の結論は次のようなものであった<sup>713</sup>。

「もし、これらの航空機が完全に改修されていた場合、それら航空機はイギリスの任務部隊に最も大きな経空脅威を引き起こすであろう」。

5 月 3 日の夕刻、任務部隊に配布された合同情報委員会 (JIC) の情勢要約(intelligence summary)は、アルゼンチンのシュペル・エタンダール戦闘機へのエクゾセ・ミサイルの装着に関して比較的楽観的な評価をしていた<sup>714</sup>。

「エクゾセの作戦上の能力は多少落ちたと考えられる理由がある。それは、フランスの技術者がエクゾセ・ミサイルをシュペル・エタンダール戦闘機に装備する作業を中断したためである」。

後に、アルゼンチンの報道機関は、アルゼンチン技術者がフランスの契約者のやり残していったエクゾセ・ミサイル・システムの最終調整を実施したと主張している。

以上のような経緯から、原則的には、この特異な脅威が考慮に入れられない理由はなくなったが、全体的な評価の流れから任務部隊は通常以上の高い段階の警戒を採らなくなっていた。

イギリス軍にとって 5 月 4 日までの最も危険な脅威は経空脅威だったが、一方で重大な関心事項はアルゼンチンのドイツ製 209 潜水艦「サン・ルイ」であった<sup>715</sup>。イギリス軍は、「サン・ルイ」は、フォークランド諸島の近海で作戦を行っている、と、まだ考えていた。フォークランド諸島近海の水域の状態は一般に潜水艦にとって楽園のようなものであった。

<sup>711</sup> *ibid.*,p. 302.

<sup>712</sup> *ibid.*,p. 302.

<sup>713</sup> *ibid.*,p. 302.

<sup>714</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*,p.302.

<sup>715</sup> *ibid.*,p. 302.

まだ問題があった。シュペル・エタンダールとミラージュ III のアルゼンチンの両戦闘機のレーダーの指標(parameters)に類似があったという問題であった。つまり、ミラージュ III をシュペル・エタンダール機と間違える可能性があるということである。5月1日、誤警報が多数生起していた。ミラージュ III をシュペル・エタンダール機と間違えた緊急警報を数多く含んでいた<sup>716</sup>。

このことは、将来のシュペル・エタンダールの近接報告に影響を及ぼすことは避けられなかった。さらに、5月1日にアルゼンチン航空機に損失があったことから、イギリス軍はアルゼンチン軍航空機による多数の襲撃を予想していた。その後、2日間は穏やかに過ぎた。イギリス空母戦闘群の200マイル以内に脅威を及ぼす航空機の存在はなかった。天候と視界は良好だが荒天であったり、または海面は穏やかだが海面を霧が覆い視界は100ヤードまで低下したりと、極端な天候であった。

しかし5月4日の午前中の海上模様は、珍しく穏やかで視界は7マイルから10マイルであった。この日、空母戦闘群はフォークランド諸島の南東40マイルから50マイルにいた。3隻のタイプ42級の駆逐艦が空母戦闘群の主体の西18マイルの防空任務の位置に占位していた。「グラスゴー」を真ん中に、空母戦闘群の進行方向の左に「シェフィールド」、右に「コヴェントリー」が占位していた<sup>717</sup>。

翌日の5月4日の早朝(0820Z時)からは、イギリス空軍がバルカン戦略爆撃機によりスタンレー飛行場を攻撃した。攻撃は同様円滑に進んだ。しかし、フォークランド諸島のアルゼンチン軍によるローランド地対空ミサイルを避けたため、高高度からの爆撃を行ったため攻撃事態は成功ではなかった。このことは、翌日(5月5日)天候が回復し十分な偵察が行われるまで、イギリス軍は知らなかった。スタンレー飛行場に関する情報の欠如は特に挫折感を引き起こしていた。シー・ハリアーは偵察作戦の訓練を受けていなかった。任務部隊の判断は穏当であった<sup>718</sup>。

2機のシー・ハリアーが戦闘空中哨戒についていた。イギリス空母戦闘群旗艦「ハーミーズ」から付与された任務南東約120マイルのアルゼンチン艦艇の搜索であった。このシー・ハリアーの任務は、「ハーミーズ」に搭乗したイギリス海軍航空隊(FAA)800飛行中隊と「インヴィンシブル」に搭乗した801飛行中隊間で生じた、シー・ハリアーの能力に関する両中隊間の意見の相違の重大な結果の1つであった<sup>719</sup>。

イギリス公式戦史は2隻の空母に搭乗した2つのイギリス海軍航空隊(「インヴィンシブル」の801飛行中隊と「ハーミーズ」の800飛行中隊)のシー・ハリアーの運用の仕方は特徴があり、その特徴を次のように記述している<sup>720</sup>。

砲術を専門とする「インヴィンシブル」の艦長、ジェレミー・ブラックは、シー・ハリアーの運用を搭乗した搭乗員、つまり801飛行中隊長であり、シー・ハリアー飛行中隊の最先任の飛行隊長であった、シャーキー・ウッドに委任した。一方、イギリス空母戦闘群の旗艦である「ハーミーズ」の艦長は自身が搭乗員であったこともあり、厳格な統制を求めた。そして、ウッドワード少将は「ハーミーズ」の艦長に

<sup>716</sup> *ibid.*, p. 302.

<sup>717</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.303.

<sup>718</sup> *ibid.*, p.302.

<sup>719</sup> *ibid.*, p. 303.

<sup>720</sup> *ibid.*, p. 29f.

全幅の信頼をおいていなかったようであり、このことがウッドワード少将に孤独感を感じさせた一因ではないか<sup>721</sup>、と。

イギリス空母戦闘群の指揮官であったウッドワード少将は潜水艦乗りであったため、航空作戦に関しては、ウッドワード少将の乗艦する「ハーミーズ」の艦長の助言に頼っていた。航空機操縦士の「ハーミーズ」の艦長、リン・ミドルトン (Lin Middleton) 大佐は、「ハーミーズ」に搭乗している 800 飛行中隊から助言を得ていた<sup>722</sup>。

この 800 飛行中隊はブルー・フォックス・レーダー導入以前に編成されたイギリス海軍航空隊である。この飛行中隊はレーダーを無用と考える飛行中隊であった。また、航空機の航法装置を信頼しない中隊でもあった。このような考えはフォークランド戦争後も生き残り、多数のフォークランド戦争後の作戦評価において、航法装置は役に立たない、つまらない玩具と見なした評価に現れている<sup>723</sup>。

「インヴィンシブル」に搭乗した 801 飛行中隊長、シー・ハリアー中隊の先任隊長、シャーキー・ワード(Sharkey Ward)は、シー・ハリアー集中飛行試験の指揮官としての戦前の経験から、次を確信していた。それは、航空機の使用を昼間に限るのではなく、夜間および天候不良時に運用できるという確信であった<sup>724</sup>。

このような段階まで、訓練された搭乗員はいなかったが、シャーキー・ワードの飛行中隊の全搭乗員は、イギリス空母戦闘群が南大西洋に着くまでに、訓練を受けた。シャーキー・ワードはブルー・フォックス・レーダーを試し、ブルー・フォックス・レーダーは予想を超えて、非常にすぐれていると判断したが、彼以外で同様の結果を再現できていない<sup>725</sup>。

シャーキー・ワードの異端者という評判は、価値の低下したブルー・フォックス・レーダーへの彼の意気込みに結びついた。シャーキー・ワードは後に次のように考えた。

もし、ブルー・フォックス・レーダーの能力が理解されたら、航空機は哨戒水域の飛行を継続することができる。目標を 100 マイル以遠から捕捉することができるからと考えた。イギリス空母戦闘群の前方で防空哨戒任務についていた「シェフィールド」他 2 隻にシュペル・エタンダールが近接したとき、実際には、シー・ハリアーは退避した<sup>726</sup>。

アルゼンチン軍はその地域でイギリス軍の任務部隊がいることを知っていた。5 月 4 日の朝、おおむね 1115Z 時(0815L 時)に、アルゼンチンの「ネプチューン」が 1 隻の駆逐艦のレーダー送信波を捕捉していたからである。その情報から、「ハーミーズ」がフォークランド諸島の東方にいると考えられ、30 分以内に、エクゾセ・ミサイルを各 1 発装備した 2 機のシュペル・エタンダールが「ハーミーズ」を探すために

---

<sup>721</sup> *ibid.*,p. 29f.

<sup>722</sup> *ibid.*,p. 303.

<sup>723</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*,p.303.

<sup>724</sup> *ibid.*,p. 303.

<sup>725</sup> *ibid.*,p. 303.

<sup>726</sup> *ibid.*,p. 303.



リオ・グランデ基地を飛び立っていた<sup>727</sup>。

5月2日にアルゼンチンは航空機による攻撃を試みていたが、エルクレスからの燃料補給上の問題により実施できなかった。今回は問題なく進んだ。5月4日1400Z時直後に、2機のシュペル・エタンダールは3隻の艦艇を発見する。「グラスゴー」が発射したレーダー妨害用金属片（チャフ）が2機のシュペル・エタンダールを「シェフィールド」へと向かわせたのであろう。ただ、結果的には、ただ単にシュペル・エタンダールが捕捉した最初の艦であった<sup>728</sup>。

2発のエクゾセ・ミサイルが発射された。1発は海面に突っ込み、もう1発は駆逐艦、「シェフィールド」に命中した。2機のシュペル・エタンダールは、エクゾセ・ミサイルの命中を素早く確認した後、旋回しアルゼンチン本土に無事帰投している<sup>729</sup>。

「シェフィールド」を撃沈させた、シュペル・エタンダール機による攻撃目標への命中の確認に関しては異論がある。つまり、シュペル・エタンダール機の偵察能力は不足していたため命中を確認できず、アルゼンチン側はイギリス放送協会(BBC)が報道により BDA (Battle Damage Assessment : 戦果確認)、つまり成功を確信したという指摘である。

ジェームズ・コラム博士は「もし、イギリスが「シェフィールド」の損失を報道しなければ、アルゼンチンは、おそらく、シュペル・エタンダールに搭載したエクゾセ・ミサイルは、まだ、うまく機能しないと判断し、以後、エクゾセ・ミサイルを使用しなかったと、見ている<sup>730</sup>。アルゼンチン側は、イギリスの報道によりを知ったという指摘である。

「グラスゴー」は適切に脅威に気づき、適切な対抗措置を採っている。「グラスゴー」の艦長、ポール・ホディノット(Paul Hoddinott)は「ヘネラル・ベルグラノー」の復讐としてエクゾセ・ミサイルによる攻撃があると思っていた。このため、ポール・ホディノットは衛星通信装置 (Satellite Communications Terminals: SCOT)の昼間の使用を禁止していた。ESM (電子戦支援対策) 装置が敵のレーダー波の探知を阻害しないためであり、「グラスゴー」は最高度の警戒状態であった<sup>731</sup>。

「シェフィールド」では、その時、メッセージを送信するために衛星通信装置(SCOT)が使用されていた。この SCOT の使用は ESM 装置が飛来する航空機のレーダー波を探知することをできなくした<sup>732</sup>。

これが「シェフィールド」に対応を採ることをできなくした原因だが、この問題だけが原因ではないと、イギリスの公式戦史はさらに原因を挙げている。

その時、「シェフィールド」の対空戦担当幹部だけでなく、その班の8名中3名が部屋から出ていたかまたは配置を外していたということである。「シェフィールド」が攻撃を受ける20分前に対空戦担当幹部は作戦室を出て、まず雲底を確認してからコーヒーを飲んでた。

<sup>727</sup> *ibid.*, p. 303., Dr.James S.Corum, "Argentine Airpower in the Falklands War," *Air & Space Power Journal*, Fall 2002, p.69.

<sup>728</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.303f.

<sup>729</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.304.

<sup>730</sup> Dr.James S.Corum, "Argentine Airpower in the Falklands War," *Air & Space Power Journal*, Fall 2002, p.69.

<sup>731</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.304.

<sup>732</sup> *ibid.*, p.304.

これらのことは「グラスゴー」からの警報の受信態勢に影響を及ぼしたと、イギリスの公式戦史は説明している<sup>733</sup>。

5月4日1356Z時、「グラスゴー」はシュペル・エタンダールのレーダー波3掃引(sweep)を探知し、速やかに、このESM探知をHFおよびUHF(Ultra High Frequency)で報告した。

しかし、「シェフィールド」に装備されているHF装置に、その時、配員がされていなかった。そして、UHF装置の方は、メッセージすべてを得ることができなかった。

2分後、「グラスゴー」は再探知し、「2つの低空のボギー (bogey:敵味方不明機)、南西方向、25マイル」と報告した。「グラスゴー」は1400Z時直後に(対空)戦闘配置(action stations)につき、レーダー妨害用金属片(チャフ)を散布した<sup>734</sup>。

「グラスゴー」の最初の通報は「シェフィールド」の作戦室の当直員の警戒状態を高めた。しかし、「シェフィールド」の対空戦の責任者は、作戦室に戻っていなかった。対空戦の責任者が戻った時、すでに適切な行動を採る時間はなかった<sup>735</sup>。

「シェフィールド」の衛星通信装置(SCOT)は、依然として、送信中であり、「シェフィールド」自身のESM装置の情報は利用できなかった。SCOTの送信を止めるには時間がかかり、送信の終了が完了する前に、1発のエクゾセ・ミサイルが明らかに近接していた。これは、命中のわずか15秒前である<sup>736</sup>。

イギリスの公式戦史はこの「シェフィールド」において当時、起こっていたことが、決定的な事象に至るのを防げた可能性について紹介している。それは、「グラスゴー」の報告が信頼されずに、ミラージュIIIによる爆弾攻撃と評価されていたことである<sup>737</sup>。懐疑的な態度は「シェフィールド」で見られたのではない。「インヴィンシブル」の対空戦調整室でも警報に対し異議が上がり、探知目標を間違いだと言っている。「グラスゴー」は反論したが、受け入れられなかった。もし、最悪の場合に対する合意か、または用心深い認識でもあったならば、「インヴィンシブル」はすべての艦艇に対し警告をしたであろうと<sup>738</sup>。

「シェフィールド」の乗員には不信があり、乗員を戦闘配置に付けることはなかった。「シェフィールド」ではダメージ・コントロールの態勢を変えることもせず、艦長に報告もされなかった。エクゾセ・ミサイルが命中する15秒前、2つの一吹き煙が報告された。

それでも、「シェフィールド」では、命中の錯誤の瞬間まで、エクゾセ・ミサイルが飛来していることを理解しなかった。「シェフィールド」ではレーダー妨害用金属片(チャフ)が発射されことはなく、ミサイル、または航空機と交戦しようという試みは行われていない<sup>739</sup>。

5月4日1403Z時、エクゾセ・ミサイル1発が「シェフィールド」の右舷に命中した。エクゾセ・ミサイルは「シェフィールド」の右外板に大きな穴を開けて侵入し、程度は小さいながら広範囲な激動を及ぼ

<sup>733</sup> *ibid.*,p.304.

<sup>734</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*p.304.

<sup>735</sup> *ibid.*,p. 304.

<sup>736</sup> *ibid.*,p. 304.

<sup>737</sup> *ibid.*,p. 304.

<sup>738</sup> *ibid.*,p. 304.

<sup>739</sup> *ibid.*,p. 304.

し、「シェフィールド」は直ちに戦闘能力を失った<sup>740</sup>。

ただ、幸運なことに、エクゾセ・ミサイルの弾頭は爆発しなかった。それにもかかわらず、大規模な火災が発生していた。深く黒い煙、主に備品および可燃性の器具からの有害で有毒な煙霧を伴った燃焼であった。あまりにも急激に被害が発生したため、多くの幹部および下士官はしばらくの間、被害の範囲、火災の箇所を把握できなかった。これらのことから、後に、居住性の改善が防火およびダメージ・コントロールを犠牲にしないことが望まれた<sup>741</sup>。

調理室のなかで多くの乗員が即死した。コンピューター室の5名の乗員は煙により在室が困難になるまで、自分たちの配置を守った。281名の乗り組み中、20名が死亡し26名が負傷した。対処能力は、艦内の混乱によるものだけではなく、衝撃により消火用の海水管が破損し消火用の海水を確保できなかったことにより、著しく阻害されている。

「シェフィールド」の消火班は僚艦（「アロー」「ヤーマス」）の支援を受けたときですら、前進ができなかった。1時間が経過しても火災はまだ拡大していたため、シー・ダートの格納筒への延焼の可能性が高くなり、「シェフィールド」の艦長は乗員に離艦を命じた<sup>742</sup>。

ウッドワードによる本国の艦隊司令官に対する「シェフィールド」に関する第1報は次のようなものであった<sup>743</sup>。しかし、ウッドワードは2時間も経たない内に自身の報告を訂正した。

「シェフィールド」は作戦室内の内部爆発による被害を受けた。場所は、ポート・スタンレーの170度70マイル。被雷と思われる。水上または航空活動はなかった」と。

5月7日、「シェフィールド」を護衛する「ヤーマス」の任務から注意を逸らす目的と、アルゼンチンの将兵を眠らせないことを目的に、「アラクリティ」がスタンレーの砲撃のために派出された。天候状況は変わらず悪く、航空活動の可能性はほとんどなかった<sup>744</sup>。

フィールドハウス海軍大將は後に自身の見解を次のように記録している。

数名の主要な幹部に未熟な問題はあるが、「シェフィールド」は以前アルゼンチンが行った航空攻撃の無能さにだまされ安心していった。エクゾセ・ミサイルのように海面すれすれに飛行するミサイルは特に危険であり対処の難しい脅威であるという考えであった。このような事情に加え、最終的には戦争には勝利したという特別な状況から、フィールドハウス海軍大將は「シェフィールド」の幹部を軍法会議にかけても得るものはない。「シェフィールド」の損失は「高価な警鐘であり、真のアルゼンチンの能力の前触れであった」と、フィールドハウス海軍大將は考えていた<sup>745</sup>。

---

<sup>740</sup> *ibid.*,p. 304.

<sup>741</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*,p.305.

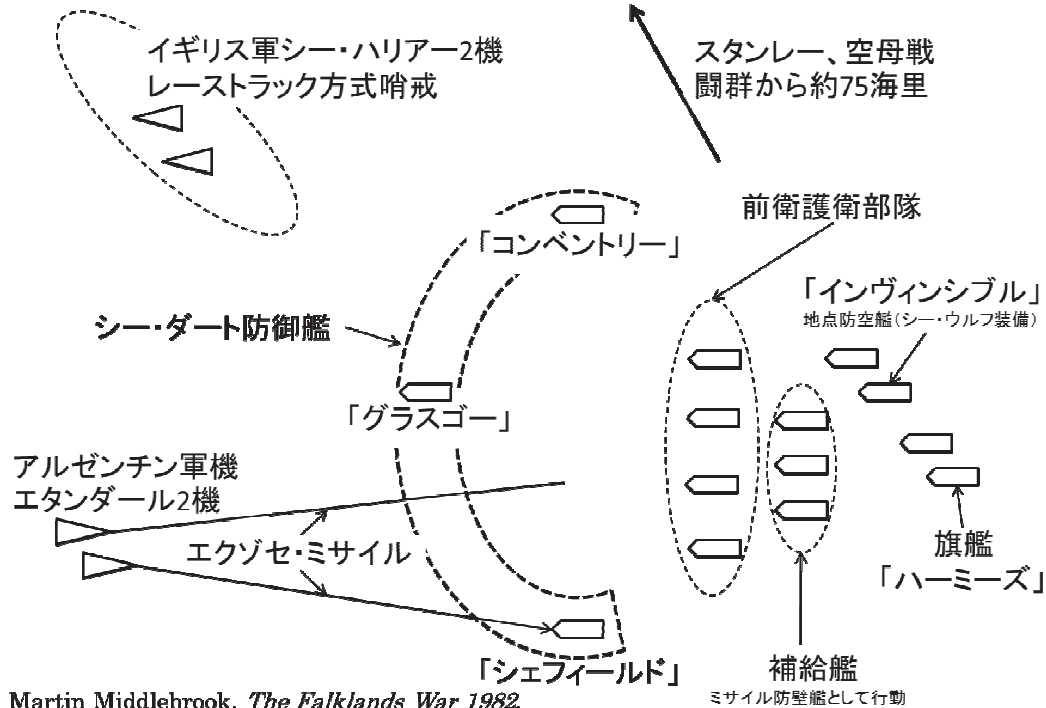
<sup>742</sup> *ibid.*,p. 305.

<sup>743</sup> *ibid.*,p. 305.

<sup>744</sup> *ibid.*,p. 305.

<sup>745</sup> *ibid.*,p. 305.

図第13 「シェフィールド」被害時の状況



Martin Middlebrook, *The Falklands War 1982*,  
Penguin Books 2001, p.157を基に作成

Summary of Actions, May 2-21 1982

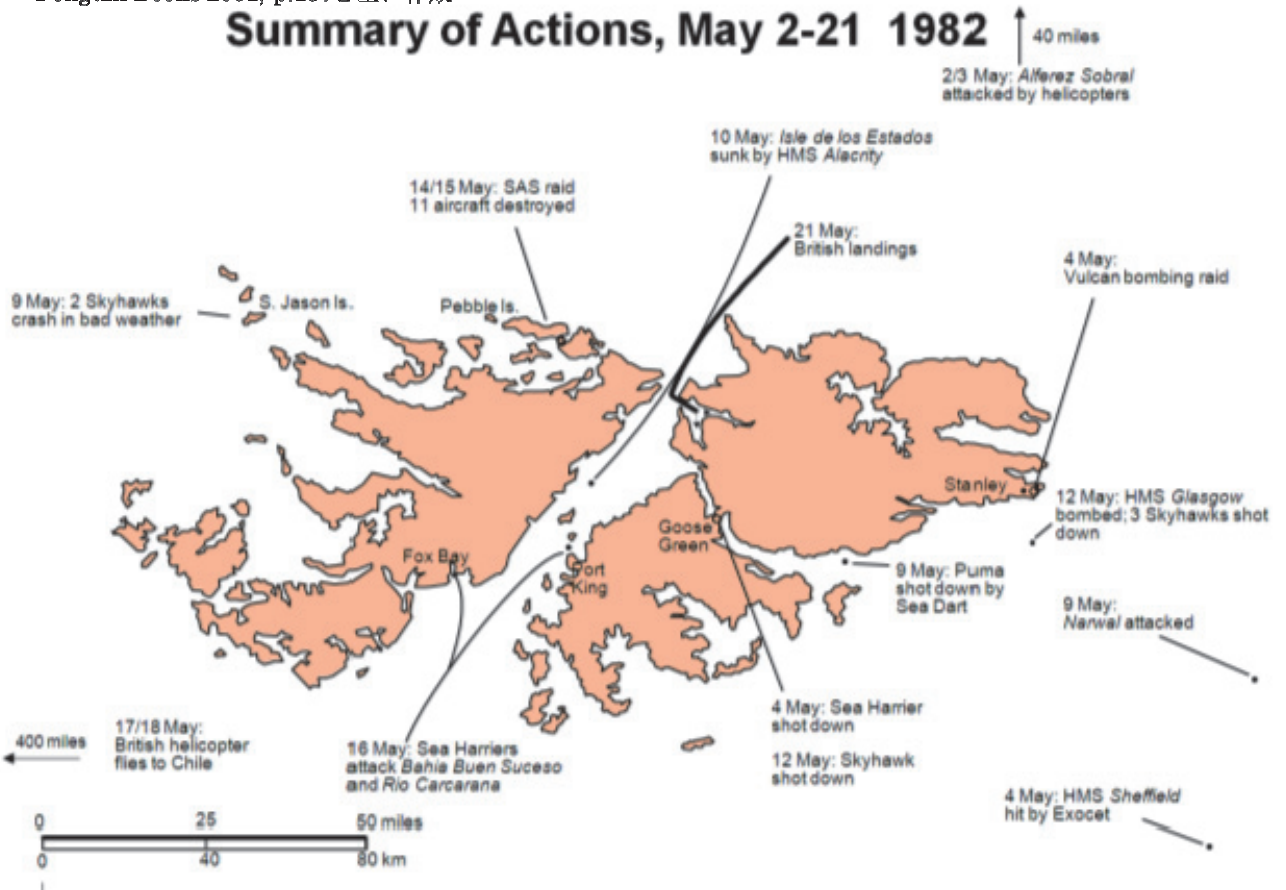


Figure 14. Summary of Actions, 2 to 21 May 1982. Source: *The Fight for the Malvinas*, 128-9.

図第14 5月2日から21日の間の主要事象

Douglas N. Hime, *The 1982 Falklands/Malvinas Case Study*, The United States Naval War College Joint Military Operations Department, June 2010, p.27.から。

## 第6節 サン・カルロス上陸における海軍

### 第1項 空母戦闘群と水陸両用群の合同

ロンドンでは戦時内閣がフォークランド諸島への上陸に関する検討を行っていた5月18日、イギリスの任務部隊の空母戦闘群と水陸両用群が最終的に合同した。

水陸両用群は夜の間、完全排除水域東端の待機区域に入った。水陸両用戦部隊の指揮官をいらだたせた報道があった。空母戦闘群と水陸両用群の合同が報道されたためである。

この件は、再度、軍事上の作戦と政治的な必要性が異なることが示される事例となった。ノット国防相は報道は政治的な理由で軍事的な選択肢は止められないことを説明するのに有益であると考えたための報道であった<sup>746</sup>。

水陸両用戦部隊の艦艇は1950年代の艦艇であった。2隻の強襲揚陸艦(LPD)の「フィアレス」、「イントレピッド」、この2隻はそれぞれ150名を輸送できる4隻の上陸用舟艇揚収艇(LCU)を搭載している。

水陸両用群指揮官のマイケル・クラップ海兵隊准将は「フィアレス」に乗艦した。艦首のドアから直接沿岸に装備品および車両を揚陸することのできる5隻の兵站揚陸艇(LSL) (他の船に移載することも可能)「キャンベラ」、「ノーランド」、「エルク」、「ユーロピック・フェリー」、「アトランティック・コンベアー」、これらを支援するイギリス艦隊補助部隊の「ストームネス」、「タイドプール」、艦隊補給艦の給水船フォート・トロントで編成され、「アントリム」、「アーゴノート」、「アーデント」、「プリマス」が両用戦群の艦艇を護衛していた<sup>747</sup>。

5月18日、1100Z時、水陸両用群は空母戦闘群の指揮官が乗艦する「ハーミーズ」および「ブリリアント」と合同し、マイケル・クラップ海兵隊准将とウッドワードとの会議が行われた。このころ、「フォート・オースティン」、「プリマス」も主隊に合同している<sup>748</sup>。

この時のマイケル・クラップとウッドワードの会議は、前回、アセンション島での会議と全く異なり友好的な会議であったという。というのは、この時、ウッドワードはマイケル・クラップの水陸両用群へのエアー・カバーの提供が可能となっていた。というのは増援のシー・ハリアーおよびイギリス空軍のハリアーが本国から届いたためであった「ハーミーズ」のハリアーは、6機のハリアー(GR.3)と4機のシー・ハリアーが追加され、計21機となり、「インヴィンシブル」には4機のシー・ハリアーが追加搭載され、計10機となり、空母戦闘群としてハリアーを31機保有するようになっていたためである<sup>749</sup>。

サン・カルロスへの上陸計画は当初、「キャンベラ」に2個海兵隊コマンド大隊(第40および第42)および陸軍第3空挺大隊の計2,000が乗艦することで計画されていた。しかし、フィールドハウス海軍大將が1隻に多くの兵員を乗船させることに難色を示したため、フィールドハウスの陸上部隊副司令官ムーア少將が、クラップ准将達に1隻の艦船に3個の隊を乗船させて強行上陸することは受け入れられないという

<sup>746</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.466.

<sup>747</sup> *ibid.*, p. 466.

<sup>748</sup> *ibid.*, p. 466.

<sup>749</sup> *ibid.*, p. 466.

電報を發した。この電報はクラブとトンプソンを憤激させている。このノースウッドからの要求は、「キャンベラ」から他の艦船に兵員を移乗される必要があったためであった<sup>750</sup>。

当該海域の通常の海上模様から、気象、海象の影響を受けない海域、サウスジョージア島かフォークランド諸島で夜間でなければ困難と考えられた。しかし、「キャンベラ」から他の船舶への移乗は時間の遅れに関係なく命じられた。

5月19日、天候は通常と違って晴れ海面は穏やかになった。第40海兵隊コマンド大隊は「フィアレス」に、陸軍第3空挺大隊は「イントレピッド」に、上陸用舟艇揚収艇により移乗が行われた<sup>751</sup>。

## 第2項 サン・カルロス上陸における欺瞞（陽動）作戦「トルネード」

イギリス軍はサン・カルロス上陸作戦のために欺瞞作戦を行っている。その欺瞞作戦「トルネード」は3つの側面をもっており、アルゼンチン軍にイギリス軍の主要な関心はポート・スタンレーの近郊にあると印象付けることを目的としていた。

スタンレーとショアズール海峡の間の地域を約4日間、アルゼンチン軍の兵員を悩まし、欺瞞し、その地域にイギリス軍が上陸すると思わせて、アルゼンチン守備隊の指揮官の意識をその地域に向けることが目的であった。この砲撃以外に偽りの通信や飛行活動を行っている<sup>752</sup>。

欺瞞作成は、近く実行される作戦暗号名「トルネード」に関する戦略的な電信の漏えいから開始された。それは「大規模なアルゼンチン本土とフォークランド諸島に対する連合作戦(Combined)が近く実行される」という内容のものであった。

当該地域で航空活動が行われ、陸軍の特殊空挺部隊(SAS)が上陸して、偽情報を流し、上陸用の装備品を当該地域に置いてきたり、艦砲射撃を行ったり、海軍の防空能力の不備な点に関する漏えい、架空の偵察隊の上陸に関する漏えい、アルゼンチン本土の空軍基地に対するバルカン戦略爆撃機による爆撃の可能性に関する欺瞞活動が行われた。それら各種欺瞞活動は、実際の上陸が計画されていた前日に最も緊迫感を与えるように計画されていた<sup>753</sup>。

この欺瞞計画は、「グラモーガン」にスタンレー半島沖に配置させることになった。ライブリー・アイランドの艦砲射撃の位置、ショアズール海峡への入口の両側の沿岸の地点であった。ウェセックス・ヘリコプターは沿岸で飛行して欺瞞通信を行った<sup>754</sup>。

第2の側面は陸軍特殊空挺部隊(SAS)のD中隊がダーウィン 区域で、アルゼンチン軍の注意がダーウィン地区に向くような牽制行動をとることとされた<sup>755</sup>。

第3の側面はロンドンでの政府による解説であった。劇的なことは生起することはなく、すでに多数の

<sup>750</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.466.

<sup>751</sup> *ibid.*, p. 466f.

<sup>752</sup> *ibid.*, p. 467.

<sup>753</sup> *ibid.*, p. 467f.

<sup>754</sup> *ibid.*, p. 468.

<sup>755</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.468.

上陸が進行中だという印象を強めるものであった。

5月20日、イギリス国防省国防政務次官(PUS)のクーパー(Sir Frank Cooper)は次のような確認できない事実関係の説明を行っている<sup>756</sup>。

「今回の作戦をあの第二次世界大戦の時代ように考えてはいけない。あの「D・デイ」のように、総員が沿岸などに突進する・・・指揮官が正しいと考えた時、あらゆる段階で圧力を加えることになるであろう」

※Dは Departure の略：1944年6月6日の連合軍がノルマンデーに上陸を開始した日

クーパー国防省国防政務次官は後日、次のように上述の発言を弁解している。つまり、上陸は延期された可能性があるからだという、その理由は、天候である。そして、抵抗のない上陸が意図されていた。これらは、「D・デイ」とは全く違うと<sup>757</sup>。

強行上陸計画は3つの段階（段階）の公にされていない上陸が関係するものであった<sup>758</sup>。第1段階は第40海兵隊コマンド大隊および第45海兵隊コマンド大隊が同時に海岸への強行上陸。第2段階は、陸軍の第2および第3空挺大隊はポート・スタンレー入植地の確保を目的に上陸後、サセックス山の丘陵背面を確保。第3段階は、海岸堡の援護のため、ヘリコプターによる銃砲および防空装備品の陸上への輸送。その後、第40海兵隊コマンド大隊は陸上に移動し、すべての敵の陸および空の動き、特にダグラス入植地およびティール入江(Teal Inlet)を観察して報告。第3の段階は、空および陸からの敵の攻撃に対処するために、可能な限り早期に実行されることが求められた。アルゼンチン軍がとう攻撃を撃退するために申し分のない防御態勢を望んでいた海兵隊准将ジュリアン・トンプソンは次のように言っていた。

「我々は、堅固に確立された時、果敢に哨戒をし、敵の指揮をくじくために作戦を開始し、戦闘を行う。堅固に確立される前に行うことはない」

トンプソンは「上陸が本来の目的ではない」「始まりにすぎない」ということを明確にしたかったようである。ジュリアン・トンプソンは、「ピクニックではない」しかし、「私は我々が成功するという確かな確信がある」と書き残している<sup>759</sup>。トンプソンは後で、上陸命令を変更している。変更した理由はダーウィンとグース・グリーンにおける、アルゼンチン守備隊からの脅威を封じ込めることが目的であった。

第40海兵隊コマンド大隊および陸軍第2空挺大隊は、第1段階で一緒に上陸し、陸軍第2空挺大隊を迅速にサセックス山に移動させる。その後の第2段階で、第45海兵隊コマンド大隊が上陸するというも

---

<sup>756</sup> *ibid.*,p.468.

<sup>757</sup> *ibid.*,p.68.

<sup>758</sup> *ibid.*,p.468.

<sup>759</sup> *ibid.*,p.468.

のである。水陸両用群は夜間、フォークランド水道までの最終の航海となる 100 マイルを航行し、0630Z 時に上陸が開始される。可能な限り多くの上陸の足場を確保するための日出前までの時間は 5 時間であった<sup>760</sup>。

アルゼンチン軍によるエクゾセ・ミサイル攻撃の危険を避けるため、空母戦闘群指揮官のウッドワードは 2 隻の空母を後方へと配置し、追加の安全策として 42 型駆逐艦を前方哨戒艦として、航空母艦と行動させた。南大西洋で行動しているイギリス海軍の 2 隻の空母「ハーミーズ」と「インヴィンシブル」のどちらか 1 隻を仮に失うという単一の事案が、イギリス軍の全体の作戦を成り立たなくさせるということは、まだ、事実であった<sup>761</sup>。

このような理由から、航空母艦を後方に配置したため、ハリアーの上陸区域における作戦時間が約 30 まで低下していた。そして、水陸両用戦の部隊と共にサン・カルロス湾に入ったフリゲート艦に兵力の防衛を依存することとなった<sup>762</sup>。

### 第 3 項 サン・カルロスへの上陸

5 月 20 日 1415Z 時に、クラブ海兵隊准将はフォークランド水道北部で準備段階を開始した。クラブの水陸両戦群はウッドワード海軍少将の空母戦闘群から分離された後、西方に向かった。上陸群指揮官のトンプソン海兵隊准将は、「フィアレス」に乗艦、同艦にはトンプソンの旅団司令部および第 40 海兵隊コマンド大隊が乗船していた<sup>763</sup>。

12 ノットで西進する水陸両用艦艇に対し「アントリム」、「ブロードソード」、「ブリリアント」、「プリマス」、「ヤーマス」、「アーゴノート」、「アーデント」、イギリス艦隊補助部隊の補給船「フォート・オースティン」が潜水艦および水上艦の哨戒を行いながら護衛した。

イギリスの水陸両用戦部隊とその護衛部隊は、アルゼンチン側に気付かれることなくポート・スタンレーの北 60 マイルを通過し、午後の早い時期に灯火管制を実施し、日没前に、強行上陸の区域に侵入するために針路を変更するための準備陣形の形成を行った<sup>764</sup>。

5 月 20 日 1600Z 時、「アントリム」と「アーデント」が船団から分離され、両艦が命じられた海域に着くべく、フォークランド水道に進出した<sup>765</sup>。

5 月 20 日 2000Z 時頃、主隊である水陸両用戦群の部隊は南西に変針し、各艦が連なり到着するために 3 個の縦列を形成した<sup>766</sup>。

第 1 波は 2 隻の強襲揚陸艦(LPD)「フィアレス」、「イントレピッド」で編成され、フォークランド水道への侵入開始の部分を「ヤーマス」護衛し、イギリスの上陸部隊をサン・カルロス湾へと先導した。2 隻

<sup>760</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.468f.

<sup>761</sup> *ibid.*, p.469.

<sup>762</sup> *ibid.*, p.469.

<sup>763</sup> David Brown, *The Royal Navy and The Falklands War*, p.178.

<sup>764</sup> *ibid.*, p.78.

<sup>765</sup> David Brown, *The Royal Navy and The Falklands War*, p.179.

<sup>766</sup> *ibid.*, p. 179.



の強襲揚陸艦は上陸用の舟艇だけを搭載していた。このため、他の上陸部隊を乗船させている艦船が到着する前に、上陸揚収艇・LCUを水上に出し、上陸揚収艇・LCVPを降下する必要があったため、その時間が必要であった<sup>767</sup>。

第2波は「キャンベラ」、「ノーランド」、「ストームネス」で編成され、「プリマス」が「ブリリアント」とともに先導し、「フォート・オースティン」後衛を務めた。2隻の強襲揚陸艦が上陸揚収艇を降下する区域に45分遅れて到着した<sup>768</sup>。第3波は、5隻の兵站揚陸艇(LSL)と「ユーロピック・フェリー」が「ブロードソード」および「アゴノート」に護衛されて続いた。この第3波は、第2波に4時間遅れてフォークランド水道への入口の最狭部を通過することになっていた<sup>769</sup>。

「アーデント」と「アントリム」は先の欺瞞作戦「トルネード」の支援に派出されていたため、上陸部隊に急いで合同している<sup>770</sup>。「アントリム」は1900Z時頃から2310Z時頃にかけて、ファニング・ヘッドのアルゼンチン軍に対処する特殊部隊および艦砲射撃支援班をウェセックス・ヘリコプターにより上陸させた。「アーデント」は、2000Z時頃、フォークランド水道の入口を通過後に30ノットで指示された海域に向かい、2100Z時頃までに、ダーウィンを欺瞞目的で急襲する海軍特殊舟艇部隊(SBS)に艦砲射撃支援(NGS)する海域につき、シー・キングによる飛行作業を行った後、フォークランド水道の最狭部に戻っている。

「アントリム」は2215Z頃にフォークランド水道の入口に到着、「ヤーマス」がすぐ後に続き、対潜掃討を実施した。対潜作戦は、輸送船「フォート・オースティン」に搭載中の第826飛行隊のシー・キング2機が参加し、ノース・ウエスト島と西フォークランド島のポーク岬の間に哨戒線を確立して、駆逐艦は東フォークランド島の沿岸に接近シー・キャット島近辺の位置から強行上陸艦艇の第1波および第2波の進入を掩護した<sup>771</sup>。

第1波の「フィアレス」は2245Z時に最狭部を通過、後方1マイルを「イントレピッド」が続いていた。ファニング・ヘッドの反対側のジャージー岬の300ヤード以内を通過している<sup>772</sup>。2隻の強襲揚陸艦がフォークランド水道内に十分進入してから、東フォークランド島の海岸に接近するために変針、さらに北上し、「アントリム」を過ぎ、2320Z時にチャンチョー岬に投錨するために、上陸揚収艇を発進させるための作業を開始した<sup>773</sup>。

5月21日の0400Z時、イギリスの上陸部隊は配置についた。同じころ、2つの陽動作戦が行われた。1つは、アルゼンチンの守備隊の注意をスタンレーに向けさせるために「グラモーガン」が艦砲射撃をスタンレー付近で、もう1つは、特殊部隊による急襲と「アーデント」による艦砲射撃がグース・グリーンと

---

<sup>767</sup> *ibid.*, p. 179.

<sup>768</sup> *ibid.*, p. 179.

<sup>769</sup> *ibid.*, p. 179.

<sup>770</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.469.

<sup>771</sup> David Brown, *The Royal Navy and The Falklands War*, p.179.

<sup>772</sup> *ibid.*, p.179.

<sup>773</sup> David Brown, *The Royal Navy and The Falklands War*, p.179f.

ダーウィンで実施されていた<sup>774</sup>。

5月21日の0740Z時、機関銃と迫撃砲を携行した3名の海軍特殊舟艇部隊(SBS)隊員が、「アントリム」の艦砲射撃のための前方観測員の支援を得て、ファニング・ヘッド(Fanning Head)の東方に上陸した。これは、ファニング・ヘッドに配置されているアルゼンチン軍の25歩兵連隊の一部の部隊に対処するためであった。ファニング・ヘッドはサン・カルロスの入口を見下ろす位置にあり、イギリスの上陸部隊が上陸を開始した場合、アルゼンチン軍は迫撃砲や対戦車兵器を使用してイギリスの部隊に耐えがたい損害を与えることが可能な場所であった<sup>775</sup>。

ファニング・ヘッドのアルゼンチン軍の近傍への艦砲射撃および迫撃砲による攻撃の後、アルゼンチン軍が退去を開始したので、イギリス軍はアルゼンチン軍に降伏を求めたが、ファニング・ヘッドのアルゼンチン軍は降伏を拒絶した。戦闘が継続され、12名のアルゼンチン兵が死亡、イギリス軍は9名のアルゼンチン兵を捕虜として捕えた。約42名のアルゼンチン兵が逃走した。逃走するアルゼンチン兵は、東方に逃げながらイギリス軍のシー・キングと交戦、逃走したが、イギリス陸軍航空隊のガゼル(Gazelle)ヘリコプター2機を打ち落とした。

パイロット2名、搭乗員1名が死亡、1名が、水上で射殺された<sup>776</sup>。

イギリス軍による実際の上陸は、好ましい環境下で行われた。海兵隊准将ジュリアン・トンプソンは後日、この日を、「鼓舞する日」(inspiring day)と表現した。上陸時の天気は穏やかで、アルゼンチン軍の抵抗はなかった。唯一、問題があったのは行動の遅延が続き、上陸部隊が海岸を攻撃する時間が、5月21日0730Z時(アルゼンチン時間で0330)で約1時間遅れていた<sup>777</sup>。

遅れた原因は「フィアレス」の欠陥のある衛星航法システムにあった。その衛星航法システムは指揮艦である「フィアレス」は実際よりも先行していた。最初に陸上に入った陸軍第2空挺大隊はアルゼンチンの特殊部隊であり、アルゼンチンの特殊部隊は驚きを表していたようである。彼らは、明らかに上陸は翌日実施されると見込んでいたようである。

そして、第40海兵隊コマンド大隊が上陸し、サン・カルロス入植地を確保し、イギリス国旗を掲揚した。第40海兵隊コマンド大隊は14名の子どもを含む31名の島民と遭遇しただけで、アルゼンチン軍との交戦はなかった<sup>778</sup>。

5月21日、1100Z時、すでに明るくなってきた時、第45海兵隊コマンド大隊および陸軍第2空挺大隊が上陸した。第45海兵隊コマンド大隊は、難なく、アイアス湾(Ajax bay)の古い冷凍工場を占拠した。陸軍第3空挺大隊は北翼を防衛するためにサン・カルロス湾に上陸した。第42海兵隊コマンド大隊は、予備として洋上にて待機した<sup>779</sup>。

---

<sup>774</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.469.

<sup>775</sup> *ibid.*, p. 469.

<sup>776</sup> *ibid.*, p. 469.

<sup>777</sup> *ibid.*, p. 469f.

<sup>778</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.470.

<sup>779</sup> *ibid.*, p. 470.

上陸舟艇、mexeflotes およびヘリコプターは、直ぐ後続の兵員、すべての装備品、弾薬、燃料、備品類を陸上に移動を開始した。部隊が陸上に上陸し、周辺の戦術上重要な高地を一旦確保した後の優先的な作戦行動は、レピア地対空ミサイルの発射台の設置であった。

レピア地対空ミサイルの発射台に続き、旅団の整備区域、医療本部、燃料貯蔵所、ハリアー離陸場(Harrier pad)といった不可欠な設備を構築するうえで必要な備品類および付属装置が陸揚げされた。

5月21日中、防御陣地の準備が、サン・カルロスの船舶を目標とするアルゼンチンはいつもの急襲は続いた。陸軍第2空挺大隊は南に進み、サセックス山に防御拠点を築いた。

サセックス山の位置は、アルゼンチン軍がダーウィン 地区から反撃するさいに通ることになる経路を効果的に閉塞できる位置であった。第40海兵隊コマンド大隊は、ヴァード山を目指して東進した<sup>780</sup>。

#### 第4項 イギリス上陸部隊に対する支援

「ハーミーズ」を発艦した1組のハリアー(GR.3)はセント山にあるアルゼンチン軍のヘリコプター駐機場の攻撃を成功させた。成果は、イギリス軍の特殊部隊の隊員により、チヌーク・ヘリコプター1機とピューマ・ヘリコプター1機を破壊したことを確認している。イギリス軍にとりこの攻撃の成果は大きかった。というのは、アルゼンチン軍が拠点への兵力を輸送する能力を低下させたからである<sup>781</sup>。

西フォークランド島を攻撃した別のハリアー2機のうち1機だけが着陸装置に不具合を抱えながらの帰艦となった。ハワード湾の上空でアルゼンチン側のイギリス製ブローパイプ地対空ミサイルによりハリアー1機が撃墜され、パイロットは脱出している<sup>782</sup>。

グース・グリーンではイギリスの海軍特殊舟艇部隊(SBS)が6機のプカラ攻撃機が離陸準備を行っているのに気づき、「アーデント」に飛行場に対する砲撃を要請した。1機だけが離陸したが、海軍特殊舟艇部隊(SBS)のステインガーにより撃墜された。しかし、サン・カルロスにおけるイギリス軍の活動はすでに報告されていた。この報告とファニング・ヘッドから撤退してきた兵員の報告から、アルゼンチン司令部はこれまでスタンレーおよびグース・グリーン近辺からの報告よりも、サン・カルロスの方がより徹底的な調査が必要と判断させることになった<sup>783</sup>。

アルゼンチンは軽攻撃機のアエルマッキをスタンレーからサン・カルロスに向かい、攻撃を行い、「アーゴノート」に小被害を負わせた。「アーゴノート」の乗員が3名負傷した。

アエルマッキはスタンレーに帰投し、サン・カルロスにおける艦船の情報を報告した<sup>784</sup>。アルゼンチンはまだ上陸に気づいていなかった。当初、この情報によりアルゼンチンが行ったことはほとんどなかった。陽動との区別がはっきり区別できないでいたためである。しかし、即応状態で待機していたアルゼンチン空軍にとっては行動すべき時となった。5月21日の1225Z時、アルゼンチン本土のリオ・グランデ基地

<sup>780</sup> *ibid.*, p. 470.

<sup>781</sup> *ibid.*, p. 470.

<sup>782</sup> *ibid.*, p. 470.

<sup>783</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.470.

<sup>784</sup> *ibid.*, p. 470f.

から最初のダガーが離陸した<sup>785</sup>。

#### 第5項 アルゼンチン空軍の反撃とイギリス艦艇

イギリス側はアルゼンチン軍が攻撃を始めることを理解していたため、艦艇はもっとも高い警戒状態を維持していた。5月21日、イギリスの艦艇は1325Z時にスワン島の近くの水道にアルゼンチン空軍のダガーが低高度で侵入して来るのを視認した。アルゼンチン空軍の第1波は9機のダガーが飛行してきた。アルゼンチンのダガーは最も接近しやすい2隻のイギリス艦艇に向かった。

ダガーの目標となったのは、「アントリム」と「ブロードソード」であった<sup>786</sup>。「アントリム」は被害を受け、一時的に動けない状態となった。「アントリム」の乗員8名が負傷し、不発となった1000ポンドの爆弾が艦内にとどまっていた。「ブロードソード」は機関砲を受け、8名の乗員が負傷、2機艦載機リンクスも被害を受けた<sup>787</sup>。別の急襲が「アントリム」に一直線に向かった。「アントリム」のシー・キャットが作動せず反撃できなかった。別のダガーが「フォート・オースティン」に向かったが、「フォート・オースティン」は機関銃だけで防衛した。さらに被害を受ける前に「ブロードソード」がシー・ウルフで対処した。

この後、ゲース・グリーンから飛来したプカラによる偵察飛行はあったが、2時間はアルゼンチン航空機による攻撃はなかった。そのプカラは「ブリリアント」に誘導されたハリアーにより撃墜されている。この高性能のレーダーを装備している「ブリリアント」は、被害を受けた「アントリム」から戦闘哨戒機を管制する任務を引き継いでいた<sup>788</sup>。

次のアルゼンチンによる攻撃は1600Z時までには生起したが、大失敗となった。A4が4機飛来し2機は方向を変え、残りの2機はアルゼンチンの廃船(Rio Carcarana)を、イギリスの商船と思い攻撃のために近接していった。1機が廃船(Rio Carcarana)を攻撃したが、間違いに気づき、北上を続け、「アーデント」を発見し攻撃したが、爆弾は外れた。シー・ハリアーが現場に着いたときは、攻撃を阻止するには遅く、スカイホーク(A4s)の後を追跡していた時、東に向かう4機に遭遇した。シー・ハリアーが近接したとき、スカイホーク(A4s)は爆弾およびウイング・タンクを投下したが、2機はサイドワインダーに撃墜された<sup>789</sup>。

アルゼンチンの航空攻撃は、小康の後、1730から一層危険をはらんだ一連の航空攻撃が始まった。アルゼンチンの航空攻撃の第1波は、シュペル・エタンダールと評価され、多くの艦艇がレーダー妨害用金属片(チャフ)を発射することになった。一組のシー・ハリアーが迎撃に向かい、シュペル・エタンダールではなく4機のダガーに遭遇し、ダガー1機が撃墜された<sup>790</sup>。

---

<sup>785</sup> *ibid.*, p. 471.

<sup>786</sup> *ibid.*, p. 471.

<sup>787</sup> *ibid.*, p. 471.

<sup>788</sup> *ibid.*, p. 471.

<sup>789</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.471.

<sup>790</sup> *ibid.*, p. 471.

残りの3機は、西フォークランド諸島から低高度で侵入してきたため探知されることなくやって来たスカイホーク(A4s)により先導され、侵入を継続し、直ちに「アーゴノート」を攻撃した。2発の爆弾は不発となり「アーゴノート」は救われたが、動くことはできなかった。「アーゴノート」の乗員2名が死亡し、ファニング・ヘッドの近くの岩に衝突しそうになり、衝突を避けるために「アーゴノート」は錨を入れた<sup>791</sup>。

12機を超えるアルゼンチンの航空機が入江に侵入し、ブローパイプや小火器そしてレピア地対空ミサイルの弾幕を浴びせられるなか、行く手のものが何であろうと、アルゼンチン軍機を混乱させるために照明弾などにより作られた煙幕を通して見えた物が何であろうと攻撃した<sup>792</sup>。

アルゼンチン軍機の機関砲が「ブロードソード」と「ブリリアント」に命中し、被害と名的損害を与えた。アルゼンチン軍機の攻撃は、イギリスの2機のシー・ハリアーによる迎撃により局限され、シー・ハリアーはサイドワインダーで3機のダガーを撃墜した「ブリリアント」のシー・ウルフは満足いく結果を出せなかった。「ブリリアント」のシー・ウルフのレーダーが自動追跡(lock on)しなかったのが原因であった。自動追尾しなかった理由は目標が「ブリリアント」に真っ直ぐというより、むしろ斜めに向かってきたためである<sup>793</sup>。

ついに、アルゼンチンの攻撃は成功した。1755Z時、3機のアルゼンチン海軍航空隊のスカイホーク(A4s)が、ノース・ウエスト島の3マイルを哨戒中の「アーデント」を発見した。「アーデント」は艦砲射撃支援(NGS)の任務についていた。「アーデント」は艦砲射撃支援(NGS)の任務を終え、アルゼンチンの航空攻撃の主流に移された<sup>794</sup>。「アーデント」はシー・キャットを発射することができず、3発の爆弾を受け、3発中2発が爆発した。「アーデント」はサン・カルロス水路に近接するよう命じられていた。すでに被害は大きく、使用可能な武器はほとんどなく、アルゼンチン軍機のスカイホーク(A4s)の第2波に耐えることはできず、爆弾による被害と名的損害を受けた。

スカイホーク(A4s)が爆弾を投下直後に、「ブリリアント」に管制されたハリアーがそのスカイホーク(A4s)を迎撃し、3機すべてを撃墜した。

「アーデント」の被害状況は悪かった。「アーデント」は傾き、操舵ができる状態ではなく、わずかに防御できたが、シー・キャットは無く、4.5インチ砲の電力は喪失していた。次のアルゼンチン軍機の攻撃の時には小火器だけが使用可能であった。「アーデント」は7発の爆弾を受け、乗員22名が戦死し、37名が負傷した<sup>795</sup>。

次のアルゼンチン軍機の攻撃が予想され、「アーデント」の主エンジンは動いており、操舵装置は復旧し、艦は管制下にあったが、非難が唯一分別ある行動と思えた。後で、更なる被害評価は多分回復の努力を正当としたであろうと判断された<sup>796</sup>。

---

<sup>791</sup> *ibid.*, p. 471.

<sup>792</sup> *ibid.*, p. 471.

<sup>793</sup> *ibid.*, p. 471f.

<sup>794</sup> *ibid.*, p. 472.

<sup>795</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*, p.472.

<sup>796</sup> *ibid.*, p. 472.

1830Z 時、「ヤーマス」は「アーデント」に横付けし、「アーデント」の乗員を移乗させた。「アーデント」の乗員はその後、「キャンベラ」に移された。「アーデント」は一晩中燃え続け、12 時間後に沈没した<sup>797</sup>。

「アントリム」と「アーゴノート」も被害を受けたが、「アントリム」の場合は、不発弾を除去したが、両用戦群を支援する状態でも、空母戦闘群に復帰するのに適した状態ではなかった。「アーゴノート」は、6 日間も艦内の不発弾を処理できないまま、作戦にとどまるべく自艦の被害および浸水の応急処置に最善を尽くしている<sup>798</sup>。

5 月 21 日という日は、アルゼンチン、イギリスの両国を検証することになった。アルゼンチンは、3 週間以上も前にイギリスの上陸部隊を攻撃するためにアルゼンチン空軍を温存するという戦略的な決定をし、アルゼンチンでは、ほとんどすべての稼働可能な航空機を戦闘に投入する準備がなされていた。計画された出撃がすべてフォークランド諸島(マルビナス)まで到達したわけではないが、おおむね 45 回の出撃 (sorties)が行われている<sup>799</sup>。

アルゼンチンは 45 の出撃で 10 機を失った。5 機のダガー、3 機の A4Qs、2 機の A4Cs である。これ以外のアルゼンチン軍機は小火器により被害を受け、修理をせいで作戦を行うことは出来ない状態であった。アルゼンチンは 2 機のプカラも失っている。イギリスの上陸作戦の備え温存しながら、アルゼンチン空軍は計画を立てていたようには見えなかった。特に、イギリスの上陸を攻撃に来たアルゼンチン軍機は護衛機を伴わないで飛来し、最も重要な目標である両用戦の艦船を確認せず、遭遇した水陸両用艦艇を護衛するイギリスの駆逐艦を攻撃した<sup>800</sup>。

さらに、アルゼンチンは爆弾の信管に関する技術的な問題を十分に認識していたにもかかわらず、そのような問題にすら取り組まなかった。多くの爆弾が不発弾となったのは単に攻撃の態勢が原因であった<sup>801</sup>。アルゼンチン空軍の関係者によれば、爆弾が爆発しなかったのは、信管は十分な遅延時間が必要としたことに問題があったという。つまり、爆弾を発火準備状態にする時間と爆弾が目標に命中した時にその艦内で爆破くさせるために必要な時間ほど長い時間ではないが、3 機で攻撃した際、最後の航空機の真下で爆弾が爆発しないようにするためである。アルゼンチン軍はこの問題をフォークランド戦争が終わろうとする直前まで解決できなかった<sup>802</sup>。

水陸両用艦艇の護衛のためにフォークランド水道およびサン・カルロス湾に入った 7 隻の艦艇のなかで、被害を受けなかったのは「プリマス」と「ヤーマス」の 2 隻だけだった。沈没した「アーデント」以下、5 隻が被害を受けたが、これらの艦艇は、上陸群の上陸およびその装備品や備品の陸揚げにおける不可欠

---

<sup>797</sup> *ibid.*,p. 472.

<sup>798</sup> *ibid.*,p. 472.

<sup>799</sup> *ibid.*,p. 472.

<sup>800</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*,p.472.

<sup>801</sup> *ibid.*,p.472f.

<sup>802</sup> *ibid.*,p.861.

な工程にとって重要な兵力ではなかった<sup>803</sup>。

徴用船(旅客船)「キャンベラ」は5月21日中、水深と振れまわる余裕があり、攻撃を誘因しないサン・カルロス湾の西方に投錨を続けた。徴用商船(STUFT)の船員には多くが期待され、「キャンベラ」の乗員は、サン・カルロスへの上陸作戦が開始される前、水陸両用作戦区域(Amphibious Operation Area :AOA)に入ることに伴う危険について、もっともだが、心配していた<sup>804</sup>。

ノースウッズの幕僚は、「キャンベラ」が上陸日に晒される危険からのがれることのできる方策の案出に努めている。そこでは、橋頭堡を確保した後は、「キャンベラ」を営舎として使用し続けるといった「キャンベラ」の危険が増えるような提案は反駁されている。民間の船舶の十分に検討された配置と攻撃を引きよせる艦艇の即応態勢は予想以上に徴用船の被害を少なくした<sup>805</sup>。

イギリス軍によるフォークランド諸島への本格的な上陸の初日である5月21日のイギリス軍の航空機の損失はハリアー(GR.3)が1機とガゼル・ヘリコプターが機2機の計3機であった。イギリスの任務部隊は、3機のプカラ、6機のダガー、5機のスカイホークを撃墜し、そのうちの9機をハリアーが撃墜したものと評価していたが、この評価(成功)は過大な評価であった<sup>806</sup>。

晴天の日における、イギリスの護衛部隊に対する被害は本質的に驚くべきことではなかったが、シー・ウルフを沿岸で使用した際、シー・ウルフの有効性の不足が関心と呼ぶ理由があった。まだ護衛部隊の来援が到着する予定であった「アンテロープ」、「エグゼータ」、「アムバスケード」が翌日の5月22日に参加できる予定であり、「ブリストル」の部隊の7隻も数日後利用可能であった<sup>807</sup>。それでも、5月1日の時点でウッドワード海軍少将が保有していた艦艇はかなりの被害を受け始めており、ウッドワード海軍少将は、もし近代的な21型の駆逐艦を失えば、イギリス海軍全体で理由可能な代替艦は1隻しかないことを十分認識していた<sup>808</sup>。

以上はウッドワードを特別意外なことではなかった。5月21日の上陸の数日前にウッドワード海軍少将は次のようなことを書き留めている<sup>809</sup>。

アルゼンチン海軍は「心理的に打ち負かされている」(psychologically defeated)であろうが、アルゼンチンの空軍に関しては、「我々は、ここでは、イギリス原子力潜水艦(SSN)のような切り札を全く持っていない。我々が戦闘する場所選ぶことができ、シー・ハリアーは十分に活躍しているけれども、当時はアルゼンチン空軍は無傷のまま、もう少しで、終わろうとしている。「消耗戦」(exchange of attrition)は今にも始まろうとしている、と。

---

<sup>803</sup> *ibid.*,p.473.

<sup>804</sup> *ibid.*,p.473.

<sup>805</sup> *ibid.*,p.473.

<sup>806</sup> *ibid.*,p.473.

<sup>807</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*,p.473.

<sup>808</sup> *ibid.*,p.473.

<sup>809</sup> *ibid.*,p.473.

ウッドワード自身の予測は率直で、2隻の22型駆逐艦が数日後も有効な兵力として生き延びていることを期待していなかった。それでも、たとえ、空母1隻を失っても、十分に能力のあるミサイル防空陣地が敵地に確立できる限り、万事順調に進むと見積もっている<sup>810</sup>。

このような理由から、ウッドワード海軍少将は、間違いなく、これから先の2週間以内に水陸両用戦作戦区域(AOA)に多くのレピア地対空ミサイルを用意することを極度に強調していた<sup>811</sup>。ウッドワード海軍少将は移動式のレーダー（護衛艦艇のレーダーと考える：訳者）とレピア地対空ミサイルに関して次のように説明していた。

「移動式のレーダーがレピア地対空ミサイル装置の作戦に不可欠でないのなら、可動式のレーダーの提供は的外れである。私は港湾の対潜戦におよび敵の機雷敷設を阻止するために必要な艦艇による警戒レーダーの提供を継続できることを期待する<sup>812</sup>」

5月21日の種々の事案後のウッドワード海軍少将の説明は一致しており、ウッドワード海軍少将は次のような電信を送っている。

冷静さを失うのは容易であろう。我々が、もはや、地形および天候に関して最良な条件を選択することが不可能になった時、上陸後にアルゼンチン空軍と交戦することはより高くつくことを、我々は常に知っていたし、そして、受け止めていたという事実は残る<sup>813</sup>。敵を阻止している今は、地域的な制空権が確立されているので、犠牲は護衛部隊限定されなければならなかった。レピア地対空ミサイルは目視によるシステムであり、レーダーを必要としないが、ウッドワード海軍少将は、どうも、シー・ウルフがイギリス海軍の役に立たなければならないように、レピア地対空ミサイルは上陸部隊の役に立つことができることを望んでいた。「レピア地対空ミサイルはトランプのキングであり、私は、ただ単に、(1組の：訳者)トランプがキングをなくしていることが判明しないことを望んでいる、という内容であった<sup>814</sup>。

ウッドワードはミサイルの最初の最少の効果により落胆はしなかった。そのことは沿岸での短い期間で釈明できた。翌日の午前中までに、ウッドワード海軍少将は「レピア地対空ミサイル中隊のほとんどは、稼働状態であるべきである」と自身の戦闘日誌に記録している。かけがえのない艦艇に立ち去られている間、マイケル・クラブ海兵隊准将にクラブ自身の地域防空を残すことができた。

イギリスの公式戦史は、この件に関して攻撃はアルゼンチンに犠牲を払わせたと評価しているウッドワ

---

<sup>810</sup> *ibid.*,p.473.

<sup>811</sup> *ibid.*,p.473.

<sup>812</sup> *ibid.*,p.473f.

<sup>813</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition*,p.474.

<sup>814</sup> *ibid.*,p. 474.



ードを楽観的であったと評価している<sup>815</sup>。

「アルゼンチンの作戦可能な航空機の約 50 パーセント、そしてアルゼンチンが我々を負かしたこと以上に、ともかく、少なくとも我々はアルゼンチンをかなり負かしているはずである。実際に、アルゼンチンは攻撃する艦船を間違えるという点で愚かであり、そして我々の旧式の艦艇にだけした損害を与えていないという点で不首尾であった<sup>816</sup>」

#### 第 6 節 アルゼンチン海軍の作戦の経緯——決戦から「現存艦隊」(Fleet in Being) へ

アルゼンチンの軍事評議会は、フォークランド(マルビナス)諸島侵攻し占領後、フォークランド諸島の守備隊の増強を決定後にフォークランド諸島およびアルゼンチン本土防衛強化のための各種作戦司令部を設けた<sup>817</sup>。

占領したフォークランド諸島の防衛を任務とした南大西洋作戦司令部(South Atlantic Theater of Operations: 以下、SATO)は、フォークランド諸島の守備隊、艦隊および潜水艦部隊が隷下にあった。SATOの司令官はアルゼンチン海軍作戦部長のファン・ロンバルド中將が就いた。

フォークランド諸島の守備隊の主力は 3 個の陸軍砲兵大隊からなり陸海空からなる統合司令部(joint command)が設けられた<sup>818</sup>。戦略航空司令部(Strategic Air Command: 以下、SAC)隷下の南方面空軍(Air Force South: 以下、AFS)が戦術任務を負い、ミラージュ V、A4 - B、A4 - C、IA - 58、MK - 62、KC - 130、ボーイング 707 機を提供された<sup>819</sup>。AFS は、アルゼンチン本土のアルゼンチン軍の主要な空軍基地があるコモドロ・リバタビア(Comodoro Rivadavia)に司令部を置き、南部アルゼンチンのフォークランド諸島の地形に似たパタゴニア地方全域の基地および臨時飛行場に攻撃機を配置した。

5 月 1 日、アルゼンチン空軍は、フォークランド諸島のミラージュ戦闘機を配備せずアルゼンチン本土に配備することを決めている<sup>820</sup>。イギリスがアルゼンチン本土の飛行場を航空攻撃する可能性があるとの見積もりからである。アルゼンチン本土の防空任務は南方防空司令部(Air Command Defense Zone South: 以下、ACDZS)が担い、ミラージュ III、防空レーダー網および対空兵器類を保有した。

アルゼンチン軍がフォークランド諸島占領後のアルゼンチン海軍の作戦行動を大きく 3 段階に区分できる<sup>821</sup>。

---

<sup>815</sup> *ibid.*, p. 474.

<sup>816</sup> *ibid.*, p. 474.

<sup>817</sup> Rubén O. Moro, *The History of the South Atlantic Conflict: The War for the Malvinas (the original title: La Guerra inaudita)*, Michael Valeur tr. (New York: Praeger, 1989), p.78.

<sup>818</sup> Rubén O. Moro, *The History of the South Atlantic Conflict*, p.78.

<sup>819</sup> *ibid.*, p. 78f.

<sup>820</sup> Scot Macdonald, "The Falklands Campaign," p.74f. ; and Jeffrey Ethell and Alfred Price, *Air War South Atlantic*(New York, MacMillan Publishing Co.), 1983, pp.69 and 72f.

<sup>821</sup> Charles W. Koburger, Jr., *Sea Power*, Praeger Publishers, 1983, pp.131-133.; and Rubén O. Moro, *The History of the South Atlantic Conflict: The War for the Malvinas*, p.87.

## ○第1段階

4月5日からアルゼンチン海軍は、フォークランド諸島防衛の準備のため艦隊を大規模に再編し再補給を行った。主要な戦闘艦艇および補助艦艇は第79任務部隊として再編され、4月15日から17日の間、個艦訓練および装備品の検査を行い、プエルト・ベルグラノー（Puerto Belgrano）から出港し、目標探知訓練および対潜訓練を実施し、27日に作戦海域に指定されたフォークランド諸島南西および北西海域に展開し、アルゼンチン本土およびフォークランド諸島への攻撃に備えた。この間、アルゼンチン海軍は保有するイギリス制42型駆逐艦を用いた訓練を繰り返し行い、その弱点の把握に努め、後に大きな成果につながっている。

第79任務部隊は、2つの任務群（第79.1任務群と第79.2任務群）で編成され、各群に1隻の給油船が編入された。第79.1任務群は、アルゼンチンの唯一の空母である「ベインティシンコ・デ・マヨ」と空母を護衛するコルベット艦艇からなり、第79.2任務群は駆逐艦で編成された。この2つの任務群は、Golfo San Jorgeの東方に展開し、アルゼンチン本土とフォークランド諸島の両方を担当した。アルゼンチン本土沿岸約300マイル、フォークランド諸島北方約150マイルの海域である。戦闘が迫った際、3個の任務群に再編され、第79.1任務群は「ベインティシンコ・デ・マヨ」および4隻の駆逐艦、第79.3任務群は「ヘネラル・ベルグラノー」、2隻の駆逐艦および給油船、第79.4任務群は3隻のコルベット艦で編成され、4月30日にそれぞれ次の作戦海域について<sup>822</sup>。

- ・第79.1任務群：プエルト・デセアド(Puerto Deseado)東方
- ・第79.3任務群：スタテン島(Staten Island)北方
- ・第79.4任務群：コモドロ・リバタビア(Comodoro Rivadavia)東方

アルゼンチン海軍の航空兵力で最新のシュペル・エタンダール機は、アルゼンチン本土南部のティエラ・デル・フエゴ島のリオ・グランデ基地に配置された。「ベインティシンコ・デ・マヨ」は主力機としてA-4Qsの他、トラック、ヘリコプターを搭載していた。

アルゼンチン巡洋艦「ヘネラル・ベルグラノー」がアルゼンチン本土の南部沖で、イギリスの原子力潜水艦「コンカラー」の魚雷攻撃で沈没し、アルゼンチン潜水艦サンタフェがサウスジョージア島でイギリスのヘリコプターによる攻撃で撃座し、アルゼンチンがイギリスの駆逐艦「シェフィールド」を沈没させたときに第1段階は終わる<sup>823</sup>。

## ○第2段階

第2段階は、5月1日、「ベインティシンコ・デ・マヨ」のS2偵察航空機（アメリカ製）がアルゼンチン海軍の主隊の北方約300マイルに南下するイギリス艦艇発見後である<sup>824</sup>。

「ベインティシンコ・デ・マヨ」は発見したイギリスの艦に20ノットで接近し、夜明けに航空攻撃を行

<sup>822</sup> Rubén O. Moro, *The History of the South Atlantic Conflict*, p.87.

<sup>823</sup> Charles W. Koburger, Jr., *Sea Power*, pp.131-132.

<sup>824</sup> *ibid.*, p. 132.

う予定であった。しかし、攻撃は実行されることなく、アルゼンチン海軍の主隊は、2日間、イギリス艦艇に発見されることなく、イギリス艦艇から約100マイル離れて行動した。

アルゼンチン任務部隊はイギリスの部隊を攻撃する意図に変更はなかったが、霧および風（自然風）の不足に加え「ベインティシンコ・デ・マヨ」のエンジンに不具合が起き、自艦の速力不足も重なり、十分な攻撃装備で艦載機（A-5）を発艦させることができなかった。

アルゼンチン任務部隊の主隊は天候の回復を待ったが5月4日には大陸棚まで戻るように命じられた。この決定に影響を与えた要因は、同海域にイギリスの原子力潜水艦が存在するという噂と、イギリス側はアルゼンチン海軍の位置および行動を衛星情報から得ているとの見積もりが、アルゼンチン海軍に大規模な水上艦艇の活動および戦術的な奇襲攻撃を不可能にしたという分析がある<sup>825</sup>。大陸棚の浅水深はイギリス原子力潜水艦から安全と考えたためである。

### ○第3段階

アルゼンチンの任務部隊が大陸棚に戻ってからフォークランド戦争が終わるまで、アルゼンチン海軍の水上部隊はアルゼンチン本土の沿岸で、洋上偵察のような対潜戦任務、港湾および沿岸防備および電子戦の任務を行い、補助艦艇は輸送や再補給および捜索救難を行い、排除水域(EZ)の外にとどまってその兵力を温存し、いわゆる「現存艦隊 (Fleet in Being)」にとどまった。「ベインティシンコ・デ・マヨ」の艦載機は搭載解除され、ほぼすべての航空機は陸上基地に配置され航空作戦全般に参加することになった。

アルゼンチン潜水艦（通常型）はイギリス艦船を沈めることはできないで終戦となったが、アルゼンチン潜水艦の脅威はイギリスの水上部隊に相当な対潜戦活動を強いており、イギリス艦艇は虚探知目標などに相当の対潜攻撃を実施し対潜兵器を相当消耗した<sup>826</sup>。

---

<sup>825</sup> *ibid.*, p. 132.

<sup>826</sup> Scot Macdonald, “The Falklands Campaign,” 2000, p.73.